

令和3年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

千葉氏・禅宗・東アジア

—中世房総をめぐる新たな視座—

令和4年3月

千葉市・千葉大学



◎令和3年度 千葉市・千葉大学公開市民講座◎

仏国禅師座像 (田心寺蔵)

千葉氏 禅宗 東アジア

— 中世房総をめぐる新たな視座 —

2021年12月11日 土

参加無料

募集人数：100名

申込期間

2021年11月1日(月) から
11月26日(金) まで



◀参加申込はこちらから
千葉市立郷土博物館
043-222-8231

※応募多数の場合は抽選とさせていただきます。

開催時間 13:00 ~ 16:15
開催場所 千葉大学西千葉キャンパス
けやき会館大ホール

※新型コロナウイルス感染症の拡大状況に
よっては、後日オンデマンド配信となります。

🌸 講演1 🌸

中世東アジア世界の中の房総・千葉氏
講師：山田 賢 (千葉大学人文科学研究院・教授)

🌸 講演2 🌸

千葉一族・臼井氏と五山文学
講師：川本 慎自 (東京大学史料編纂所・准教授)

◎ 令和3年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 ◎

千葉氏 ❁ 禅宗 ❁ 東アジア

—中世房総をめぐる新たな視座—



千葉氏が活躍したのは、日本史の時代区分でいえば「中世」という時代です。これまでも「武家」としての千葉氏のさまざまな歴史上の事績について紹介されてきました。しかし、この「中世」という時代において、アジアという空間の中で房総半島や千葉氏を位置付け、把握する試みは十分ではなかったと言えましょう。さらに、千葉氏の別の側面、つまり一族の「知性」について、東アジアとの関わりという面から考えていくことも必要でしょう。

本講座では、中世・房総・千葉氏という時代・空間・人について「東アジア」という広い視座から捉え、また中国文化の受容という視点から「禅宗」と千葉一族との関わりについて具体的に明らかにしていきます。

▲白磁四耳壺（長岡堂庭遺跡出土、四街道市教育委員会）

❁ 講演 1 ❁

中世東アジア世界の中の房総・千葉氏

講師：山田 賢（千葉大学人文科学研究院・教授）

中世の千葉氏は、水上交通を媒介として房総の広い地域に影響を持っていたばかりか、列島各地域をつなぐさらに大きなネットワークを保持していたと考えられています。

こうした千葉氏の発展、それを可能にした列島の状況の背景には、東アジア世界全域に及ぶ歴史的変動があったのではないかと考えられます。さまざまな研究状況を鳥瞰しながら、中世東アジア世界の日本の列島、日本列島の中の房総について考えてみたいと思います。

❁ 講演 2 ❁

千葉一族・白井氏と五山文学

講師：川本 慎自（東京大学史料編纂所・准教授）

戦国時代の鎌倉の禅宗寺院では、水墨画に漢詩を記した「詩画軸」という作品が盛んに作られます。その漢詩を作った禅僧たちの師弟関係をさかのぼると、道庵曾頭というひとりの僧にたどりつきます。実はこの道庵は、千葉一族・白井氏の出身でした。

道庵はどんな人物だったのか、そしてどうしてその一門から学僧を輩出することになったのか、白井氏や中世の印旛沼周辺の文化的環境とあわせて考えてみたいと思います。

【申込方法】

電子申請もしくは往復ハガキでお申込みください。お申込みの際にいただいた個人情報は、本講座以外に使用いたしません。

◇電子申請での申し込み

千葉市立郷土博物館ホームページ内の当講座のページにあるリンクから電子申請によりご応募ください。



HPはこちらから

◇往復ハガキでの申し込み

往信用はがきに「講座名」「申込者氏名（フリガナ）」「郵便番号」「住所」「年齢」「電話番号」、返信用はがきに「返信用の宛先」を記入の上、以下の問い合わせ先の住所へお送りください。

◇問い合わせ先

千葉市立郷土博物館
住所：〒260-0856 千葉市中央区亥鼻 1-6-1
電話：043-222-8231

【申込期間】

2021年11月1日（月）
～2021年11月26日（金）

※応募多数の場合は抽選とさせていただきます。
※往復ハガキでの申込は11月26日（金）
郷土博物館必着。

【アクセス】



▲長岡堂庭遺跡出土陶磁器群（四街道市教育委員会蔵）

【会場】



千葉大学西千葉キャンパス
けやき会館



【ロビー】





【開 会】

司会
千葉市立郷土博物館 総括主任研究員
外山 信司



開会挨拶
千葉大学学長特別補佐・生涯学習担当
久保 勇



【講演 1】

講師
千葉大学大学院人文学研究院
教授 山田 賢



【講演 2】

講師
東京大学史料編纂所
准教授 川本 慎自



【クロストーク・質疑応答】



進行
千葉大学大学院人文科学研究院
教授 池田 忍



【閉 会】



閉会挨拶
千葉市立郷土博物館
館長 天野 良介

目次

開会挨拶（久保 勇）	1
趣旨説明（司会 外山 信司）	2
【講演1】 中世東アジア世界の中の房総・千葉氏（山田 賢）	3
資料	13
【講演2】 千葉一族・白井氏と五山文学（川本 慎自）	25
資料	36
【クロストーク・質疑応答】	48
閉会挨拶（天野 良介）	54

※本講演録は令和三年一二月二日に千葉大学けやき会館大ホールでの講座を収録した内容をまとめたものです。

開会挨拶

久保 勇（千葉大学学長特別補佐・生涯学習担当）

本日は「令和三年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 千葉氏・禅宗・東アジア」にご参加いただき、誠にありがとうございます。ただいまご紹介いただきました学長特別補佐・生涯学習担当の久保勇と申します。本年四月より中山俊憲学長が就任され、当職を仰せつかりました。よろしく願っています。

開講に際してまず申し上げたいのは、こうして皆さまを大学にお迎えして再び「対面」で公開市民講座を開催できる喜びについてです。本日は会場となっております、このけやき会館は本年七月末から先月の五日まで新型コロナウイルスワクチンの職域接種会場となっております。つい先月までのこの会場と本日の様子を比べてみますとやはり感慨深いものがございます。とはいえ、新たな変異



株が発見され、年末年始の人の移動、換気が難しい季節となり、再び感染拡大が予想される状況となりつつあります。会場の皆さまにおかれましては配布させていただきますいただいた感染対策にご協力いただきますよう、重ねてお願い申し上げます。

さて、弊学における職域接種のように、多くの人々がそれぞれの立場から新型コロナウイルスに立ち向かっているのが日常

であります。一方では後世「歴史」として語られるであろう、世界的な出来事の渦中にあることを、私たちは同時に知ることができています。後者については、情報通信環境の発達によって空間的距離とはまったく関係なく、さまざまな国の様子を即時に知ることができる環境となったからにほかなりません。現代において、「目の前の出来事」と「世界」とを結び付けているのはメディア環境、それを支える情報通信技術に一元化されていると言っても良いかと考えます。しかしながら、前近代においてはそうはいきません。昨年度オンデマンドにて開催いたしました公開市民講座「千葉氏の領域における交通と流通―水と陸でつながる人・モノの中世―」では中世の「人とモノ」の移動について、さまざまな「情報」も、異なる土地へ次第に伝播していったことが文書等から明らかになりました。本日の講座ではその「人」と「モノ」の具体的なありようにつきまして、中世の千葉氏周辺に帰着する「禅宗」に関わった「人とモノ」、また「東アジア」という空間をめぐった「人とモノ」、という枠組みの中でお話しいただくことになろうかと存じます。

私から一つだけ気に留めていただきたいことは、「人とモノ」の移動というのは一つの目的があったとしてもそれ以外の副産物と申しますか、多様な影響をもたらすということでもあります。例えば、中世の禅宗の僧侶は禅宗だけを大陸から日本に伝えたわけではありません。私がかつて書いたものの中で触れたことがあるのですが、紀州・湯浅の法燈国師、心地覚心とも申しますが、伝承のレベルではありませんものの、いわゆる径山寺味噌の醸造法を日本にもたらした禅宗の僧侶としてよく知られています。本日お話しいただく川本先生のお仕事は、禅僧がもたらしたさまざまな「学問」や「文化」を具体的に明らかにされたものと理解しております。このことは、いま対面で会場にお越しいただいている皆さまにも当てはまるのではないかと考えます。この会場にいらっしやる道中、休み時間、クロストーク、そしてお帰りの道中、「講座を聴講する」

という目的以外の「発見」や「喜び」を経験されるかもしれません。これはオンデマンドの配信では経験できない、人の移動による経験です。リアルに人が空間を移動し、人と出会い、学びが生まれることは、二年前なら当たり前のことでした。それが当たり前でなくなつた今日、この講座が対面で開催されている意義について述べさせていただきました。本日は、中世千葉氏周辺に至る「人の出会い」や「モノの移動」、そこから生まれた「文化」についての歴史、という内容です。お二人の先生方の講演内容が第一ではありますが、それ以外のさまざまな経験をお持ち帰りいただければ幸いです。以上をもちまして、私の開講の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

趣旨説明

司会 外山 信司（千葉市立郷土博物館総括主任研究員）



私から本日のテーマであります「千葉氏・禅宗・東アジア、中世房総をめぐる新たな視座」についての趣旨をご説明いたします。

本日のテーマにございます千葉を名字として名乗る武士、千葉氏が活躍したのは、日本史の時代区分でいえば「中世」という時代です。これまでも武家、武士としての千葉氏のさまざまな事跡については紹介されてきました。しかし、この中世という時代において、アジアとい

う広い空間の中で房総半島や千葉氏を位置付け把握しようとする試みは必ずしも十分ではなかったといえましょう。例えば、本日の山田先生のお話にもあるかと思いますが、鎌倉時代に千葉氏の一族から中国に渡つて貴重な仏教の典籍を持ち帰つた行、道源といった僧侶が出たことは、残念ながら千葉ではほとんど知られておりません。この了行という人物は千葉寺にいた僧侶でした。

本講座では中世、房総、千葉氏という、時代、空間、人について東アジアという広い視座からとらえ、また中国文化の受容という視点から禅宗と千葉一族との関わりについて具体的に明らかにしていきたいと考えております。

なお、ご質問ですが、コロナ感染対策のため、質問票にて承ります。講演後の休憩時間に、ご記入いただいた質問票を受付へお持ちください。ご質問は必要に応じて講演後のクwestionsで扱わせていただきます。時間の関係上すべてのご質問にはお答えできないこともあるかと思いますが、あらかじめご了承ください。

【講演1】

中世東アジア世界の中の房総・千葉氏

山田 賢（千葉大学人文科学研究所・教授）

講師紹介

山田 賢（やまだ まさる）
（千葉大学人文科学研究所・教授）

現千葉大学大学院人文公共学府・学府長。

北海道大学文学部史学科卒業後、名古屋大学大学院史学地理学専攻を修了し、博士・文学の学位を取得。

その後、北海道大学助手を経て、一九九三年に千葉大学文学部助教授として着任。

主な研究分野は中国の近世社会史で、著書としては

『移民の秩序』（名古屋大学出版会 一九九五年）、

『中国の秘密結社』（一九九八 講談社）などがある。

近年は東アジア比較史に関心を持っているが、千葉大学での全学教育科目である普遍教育の講義では、「世界の歴史と日本」、「大学生のための世界史再入門」などを担当し、世界史、アジア史といった幅広い地理、空間的視点から歴史をとらえる教育にも積極的に取り組んでいる。

はじめに ― 一三世紀から一五世紀頃における歴史の変動と共振

ただいまご紹介にあずかりました山田と申します。本日はどうぞよろしくお願いたします。

まずは私の発表のテーマ、狙いについてご説明しておきたいと思えます。世界の歴史というものを見ていくと、そこにはかなり離れた距離であつても同じような動きをしている、世界が共振しているという現象を、歴史をたどっていくとしばしば目にすることがあります。本日、主に一三世紀の日本列島、東アジアについてお話をしたいと思つていますが、この時代はユーラシア全体で大きな社会変動のあつた時期でした。その変動というのはこれからお話ししたいと思うのですけれども、東アジアにも共鳴しており、そして日本列島にも共鳴しており、その中の房総にも共鳴しており、千葉氏の活動というものもそれらを背景にして成り立っていたというふうに考えられるわけです。ですので、私の報告というのは千葉氏、房総それ自体というよりも、彼らが活動した時代、地域、その背景にあつたもの、それをまずはお話ししたい。そのことによつてこの後に続く川本先生の、いわば前座を務めたいということが趣旨でございます。

一 ハーメルンの笛吹き男 ― 一世紀から一三世紀ユーラシアの商業化

まずは一三世紀のユーラシアの中でも、東アジア、房総から最も遠いところから話を始めることにしたいと思います。みなさま、ハーメルンの笛吹き男というお話をご存知でしょうか。これは『グリム伝説集』に載っておりますので、しばしば子ども向けの絵本などにも取り上げられている話題です。ハーメルンという町でネズミが増えすぎて町の人々が



困っていた。そうするとそこに不思議な風体をした男が現れて、ネズミを退治してさしあげましょうと言うわけです【画面3】。

町の人々は半信半疑でしたけれども、藁にも縋る思いでその男に委ねてみることにしました。そうするとその男はただ笛を吹いた。すると不思議なことにネズミたちが群れをなして川に突っ込んでいってネズミの大部分がすべて絶滅してしまっただけというのがお話です。この後、町の人々はこの不思議な風体をした異様な男に謝礼を払うのが惜しくなりました。ひよっとするとネズミたちは勝手に絶滅したのかもしれない。そこで謝礼を拒否したわけですから、そうするとその男は怒って笛を吹きながら町を出て行きました。そのときにハーメルンの子どもたちがその男の後をついてぞろぞろと町を出て行ってしまい、子どもたちは二度と帰ってこなかったというのがこのハーメルンの笛吹き男の伝説です。

実はこのお話というのは、伝承では何年に起きたということがはっきりと伝えられていません。この事件が起きたのは一二八四年、つまり一二世紀、まさにこれから話題にしようとしている日本列島では鎌倉の時代です。そのときにこのハーメルンの笛吹き男の伝承があったというふうには伝えられているわけです。このお話をめぐっては、もうかなり古いのですけれども一九七四年、もうお亡くなりになり

なりました阿部謹也先生という方が『ハーメルンの笛吹き男』という歴史学の専門書をお書きになっています【画面4】。この本は今でも手にすることはできると思うのですけれども、この一二八四年という伝承が生まれたそのときのハーメルンがどのような状況にあったのかということとを古文書から丹念に明らかにした研究です。

実は阿部謹也先生は非常に慎重な言い回しをしており、このお話はこういう原因があったからできあがったのだということを断定的には語っておりません。慎重にいくつかの可能性を示唆しているだけです。ではハーメルンというのは当時いつたいたどのような状況にあったのか、あるいは中世の、一三世紀のヨーロッパにはどのような社会状況があったのかということが次の問題です。

ところで、房総の千葉氏のお話を聞きに来たはずなのにいきなりハーメルンの笛吹き男の話から始まりまして、ひよっとすると会場を間違えたんじゃないかと思っていらいらっしゃるかもしれませんが大丈夫です。最も遠いところから東アジアに、それから日本列島に、一時間の短い時間ですけれどもこれから近づいていこうと思います。ただ、てきぱきと話をしないと途中で砂漠の真ん中で迷子になったりインド洋で沈んだりするかもしれません。

さて、そのハーメルンの笛吹き男の背景にあったハーメルン周辺の社会状況というものはどういふものだったのか、阿部謹也氏は何を明らかにしたのかということなのですけれども、ハーメルン周辺では一世紀以降人口が激増していたといわれています。なぜか。これはヨーロッパ全体におそらく同じ現象が起きていたのですが、一〇世紀から一三世紀ごろというのは比較的温暖な気候が続いて農業生産力が上がった時代であるといわれています【画面5】。ヨーロッパの主要な食物、農作物というのはもちろん小麦ですけれども、小麦というのはある意味大変繊細な作物です。お米のように連作ができない、病気などにも弱い、必ずし

も高い生産力というものが最初から期待できるような穀物ではありませんでした。

しかし温暖な気候のせいで農業生産力は上がり人口が増加する、それがこの時期の一三世紀のヨーロッパです。そしてハーメルンでも同じ現象が起きていたということを、阿部謹也氏は古文書から実証的に明らかにいたしました。そして人口の増加とともに周辺からハーメルン、都市に流れ込む人口と相まってハーメルンでは切実な土地の不足ということが問題になっていました。では過剰な人口と土地の不足という困難に対して、その出口はどこに求められたのかというと、二つあります。

一つは商業化です。豊かな農業生産力を背景に好景気というものがヨーロッパ全体を覆っていたのですが、その中で商業によって生計を立てていくというあり方であり、もう一つは新しい土地を求めて辺境に移住をしていくというあり方です。実はそんなわけでこのドイツ、ハーメルンでは東方植民―ポーランド方面へ移住して、そこで新しい土地を獲得するという動き―がこの時期起きていたわけです。

ハーメルンの笛吹き男という伝承についての一つの阿部謹也氏の示唆、彼はこれを結論だとは言っておりませんが、について説明しておく、この当時ドイツには東方植民を勧誘するブローカーがたくさん入り込んでおりました。言葉巧みに若者を誘って東方植民に連れて行くという人々が活動していたわけです。そういった人間の口車に乗せられて東方面に出て行ってしまい、そこで何らかの困難に逢着して帰ってくることでできなかつたということは実際に当時の社会においていくつもあり得た可能性のうちの一つのことを、阿部謹也氏は言っているわけです。このハーメルンの笛吹き男についてはなかなかこれ以上の究明というのは難しいのですけれども、ここで阿部謹也氏が明らかにした一三世紀ヨーロッパの状況、人口が増加してその出口として商業化や移住戦略などが行われたということについては現在もほぼ了承されているところであ

ろうと思います。

まとめておきますとユーラシアの西の端、ヨーロッパでは一三世紀、そしてそれに先立つ一一、一二世紀がどのような時代だったのかというと、繰り返しになりますが、温暖な気候のもとで生産力が上昇し、商業化や人口増が進んだ時代です【画面6】。土地の不足によって農村からあふれ出し移動する人々がしのぎを削って競争するような社会。それが一三世紀のヨーロッパに出現していたというのが阿部謹也氏の見通しであるわけです。

こうして中世のヨーロッパというのは実はさまざまな方向性に膨張していくことになりました。例えば同時代に出現した十字軍というものも、単純に宗教的な情熱というよりも、こういったヨーロッパの膨張運動の一つというふうに見ることもできるのかもしれませんが。

さて、この一三世紀、あるいは一三世紀の前提としての一一、一二世紀の好景気、温暖な気候と生産力の上昇、それによる人口増、商業化という状況は実はユーラシアの東の端においても同様にあったのではないかと、この状況は実はユーラシアの東の端、日本列島という省きますけれども、例えば一二世紀のユーラシアの東、日本列島というものを想定していただくと、商業化の波というのはたしかにあったように思われます。例えば何か。平氏の台頭はその一つです。平清盛は福原に拠点を置いて瀬戸内海を押さえて日宋貿易を行っていたわけです。

東アジア海域世界の貿易というものが本格的に始動する。一二世紀というのはまさにその始まりの時期であり、その観点から見るとユーラシアの西と同じように好景気と商業化という波はやはり共振していたのではないかと、このように考えられるわけです。そして一三世紀というのはそのような好景気と、その前提として一〇〇年、二〇〇年にわたって続いたと思われる温暖な気候の時代というものの最終的なピークにあったのかもしれない、というふうにも考えられるということです。

一三世紀、中央ユーラシアというのはモンゴル帝国が東から西までを制覇した時代です。モンゴル帝国はなぜ一三世紀、かくも速やかに中央ユーラシアをすべて統合することができたのか、モンゴルは何をやったのかということを考えてみましょう。先に結論を言ってしまうと、モンゴルというのは非常に強力な武力によって進撃したというふうに一般的にこれまで考えられてきましたし、それは事実の一面であったことは間違いないのですが、しかし同時にこの時代はユーラシアの東と西同時に好景気の時代、商業化の時代であったということです。そうするとモンゴル帝国というのは実はユーラシア全体の商業化の波に乗って現れた帝国、そしてユーラシアの商業化というものがある意味では権力によって担保しようとした勢力であったというふうに考えることができるのかもしれない。



さて、そのユーラシア全体の一二世紀ごろの商業化、それに続く一三世紀の商業化ということとを考えるにあたって、ここで一つ、三上次男氏の陶磁の道という考え方をご紹介しておきたいと思います。一九六九年、イスラム地域の研究者でもあった三上次男氏が『陶磁の道』という岩波新書を出しています【**画7**】。ここで三上氏が何を言ったかというところ、八世紀から一五、一六世紀にかけて、中国陶磁器が海運を通してユーラシア全体に輸出されていた、非常

に活発な陶磁器の貿易が存在したということを書いてあるわけですが、三上氏は八世紀から一六世紀ぐらいの長いタイムスパンを取っておりますが、実質的にこの陶磁器貿易が最も栄えたのは一三世紀、つまり宋磁、それから元の染付の磁器ですね、宋や元の陶磁器、それが最も活発に世界中に流れ出したわけです。ちなみにここでは三上先生の『陶磁の道』、岩波新書に載っている地図ではなく現在使われている世界史教科書の地図をあげてありますけれども、そのほうが美しく仕上げられていて、いろいろ情報が細かに付け加えられていて便利であるということ、今の世界史教科書、なかなか工夫されてよく編纂されています。

そもそもイスラム地域を研究した三上先生がなぜ陶磁の道に注目したかというところ、彼はエジプトのカイロで大量の出土中国陶磁器を見ているからです。輸出される中国陶磁器は、中国から海を南に下り、それからインド洋を渡って、そして紅海を北上し、その突き当たりから陸路でカイロに入ります。カイロからナイル川をアレクサンドリアに向かって下ります。そしてこのアレクサンドリアから地中海を渡ってベネチアに入り、そこがヨーロッパの主要な窓口ということになっておりました。地中海に入っていくときにはカイロとベネチアが大変重要な窓口になっていたわけですね。まさにこの時代というのはヨーロッパでも十字軍の時代、戦乱というものがたびたびこの地域で起こっていた時代であったにもかかわらず、イタリヤ商人はアレクサンドリアに常駐してこの貿易を取り仕切っていたというふうに考えられているわけです。

このユーラシアの地域を一三世紀に統合するのがモンゴルです。そして今なぜベネチアの話をしたのかということなのですが、モンゴルに関する証言というとベネチア人の証言が後世大変有名です。マルコ・ポーロという男です。マルコ・ポーロ、東の彼方モンゴルまで、北京まで出かけているわけですから、もともとベネチア商人がアレクサンドリアに拠点を置いて東方貿易というものを牛耳っていたとするならばベネ

チア人であるマルコ・ポーロが東へ向かったのはまさにこれをさかのほるだけのことであつて、不思議なことでもなかったのかもしれない。

二 新安沈没船 ― 一三世紀から一四世紀前半期の東アジア世界

さて、ようやくヨーロッパから離れましょう。東へ向かいたいと思います。一三世紀というのはモンゴル帝国がユーラシア全域を瞬く間に制圧していく過程であるのですけれども、モンゴルはユーラシアの東西をつなぐ交通網というものをかなりの資金と労力を投下して整備しようとしています。こうしてモンゴル帝国のもとでは人やモノやお金の大規模な、ユーラシア規模の移動というものがあつた程度担保されるような状況というものが出現しました。ですので、誤解を招くかもしれませんが、これもあえて事態の一面を強調すると、モンゴルを武力の帝国というよりも商業化の帝国というふうに考えてみてはどうだろうということなんです。この商業化の帝国モンゴルが、もともと存在したユーラシア全体の商業化の波に乗って登場したとき、当然その商業化の波は東の端、日本列島にも届いていたかもしれません。ということでは今度はこの時代、一三世紀、中国大陸から海を越えて渡ってきた貿易品について考えてみたいと思います。

一九七〇年代、朝鮮半島南部の新安沖で一隻の沈没船が発見されました。その引き揚げ作業によって海底考古学という学問領域が世界的にも大いに注目されて進歩した、そのきっかけの一つといわれているのですけれども、朝鮮半島南部、新安沖の沈没船、これが一九七〇年代に調査をされております。そこからは二万点以上の陶磁器と二八トンにおよぶ銅銭が見つかりました【画面9】。二八トンの銅銭というのはおよそ八〇〇万枚です。この沈没船、沈没しないで航海を続けていたならばどこに行つたのだろうかということが一つの問題です。【画面10】は沈没船から出てきた木簡、木札です。この右から二番目の木札にご注目ください。

い。大きな画面なので見てとることができるかもしれませんが、「東福寺」というふうに書いてあります。この木札は何のために使われていたのかということなのですけれども、船に載っていた荷物のいわば荷主を示す荷札として使われていたものではないかというふうに考えられています。明らかにこの船の中のいくばくかのものは東福寺にもたらされる予定だったわけですから。そうするとこの船、朝鮮半島の南で沈没してしまつたわけですが、もしも順調に航海を続けていればこの二万点の陶磁器と、それから二八トンの銅銭というのは日本列島に行きついていたら可能性が大いに高いわけです。そして荷札に付いている最新の年号から、おそらくこの船は一三三三年ごろに、少なくともそこから遠からぬ時期に現在の中国の寧波から出向して博多にたどりつく予定だったということも推測されたわけです。

一三世紀というのは中国大陸と日本列島との貿易がかなり頻繁に行われた時期の一つです。歴史的にもおそらく中国大陸と日本列島の行き来が最も盛んだった時期の一つといえます。これは余計なことですが、例えば遣唐使というのは日本に大変大きな衝撃をもたらしたといわれていますが、まあ、一〇年に一回程度の行き来です。それに比べるとたぶんこの一三世紀の博多と寧波の間の貿易はかなり頻繁に船が出ていたと考えられています。この沈没船は異常にたくさん荷物を積んでいたのかもしれない、でも仮に一隻に八〇〇万枚の銅銭、それが毎度毎度、繰り返して、そして一〇年、二〇年、三〇年という長期間にわたつてもたらされていたとするならば、日本列島にやってきた銅銭の数というものは莫大な数量に達しているはずですから。

おそらく一三世紀ごろの日本列島の人口というのは、これは推測でしかわかりませんが、一〇〇〇万前後というふうに考えられていますので、それを考える八〇〇万枚の銅銭がいかに大量であったかがわかります。なぜこんなにたくさん銅銭が日本列島にもたらされていたのか



というのが次の問題です。実はこれは中国の側に大きな原因がありました。例のベネチア人、マルコ・ポーロの証言を聞いてみたいと思います【画面11】。

やや長々と文字ばかり引用してしまいましたが、かいつまんで申し上げますとここにかかっているのはマルコ・ポーロが紙のお金、紙幣というものに対して大変驚き、そしてその驚きというものを記録しているのがこの部分です。たかが紙なのにそれが金や銀の貨幣とまったく同等の権威を付与されて発行されている。この紙幣ができあがると、カーンは一切の支払いをこれで済ませ、治下の全領域・全王国にこれを通行せしめる。人々はどこへ行くこうとこの紙幣で万事の支払いができる。なんでも買い求め、支払いの段にはこの紙幣を用いる。しかし一〇ペザン

トの価値に相当する紙幣でもその重量は一ペザントにも達しない。このペザントというのがどの程度の重さなのか現在のわれわれにはよくわかりませんが、われわれにはよくわかりませんが、でも、ただ、容易に推測できるのは金属のお金が重いものに対して紙だったら軽いということですね。つまり紙のお金のメリットは、商業化と移動の時代に変化に向いているということですね。長距離の移動、それから高額取引、そういうものを大量の貴金属を持って行かなくても簡単に済ませられるというのが紙幣の大きなメリットです。これはま

さに商業化の時代ならではのお話であって、遠距離交易等が存在するかからこそ紙幣というものの具体的なメリットが出てきます。まさしく一三世紀の好景気、ユーラシア全体の商業化のたまものというふうに考えることもできるのだらうと思います。

これが鈔と言われる紙製の紙幣であります【画面12】。縦が三〇センチ近くあるかなり大きなものなんですけれども、一三世紀半ば以降モンゴルは中国大陸でこの交鈔、紙幣というものの発行を始めます。そして一三世紀の後半、南宋を占領しますと中国大陸における銅銭の使用というのを原則として禁止し、この紙幣を、交鈔を使わせようとするわけです。そして貨幣をこの交鈔へ一元化しようとして、ユーラシアの流通システムに東の端の中国大陸も組み込もうとするわけです。

このときに中国大陸で何が起きたのかということですね。不要になった銅銭の行方です。銅銭は貨幣として使えなくなるわけですね。そうするとどうなるかということなのですが、これは当時の官僚の提言の中にあるのですが【画面13】民間ではお上で銅銭を用いなくなったことを見て銅銭を蓄蔵していた家では往々にして勝手に値をつけて海外に出る商船に売り払ったりしていると。大変これは危惧すべきことだと。今まで歴代の王朝によって貴重な貨幣として使用されてきたものが、持っていた者が勝手に海外に叩き売るとか、溶かして日用什器にしてしまおうとかいうことをしている、危惧すべきことだとというのが一二八五年のこの程文海という官僚の提言の中に見えます。そうすると、奇妙なことかもしれないが銅銭というお金が貿易の商品として輸出されるという現象が起きます。

三 そして日本列島と房総

さて、一三世紀後半は、折しも世界的な貿易ブーム、商業ブームです。東アジアの海の世界が、貿易船によって最も活性化していた時代です。

その海洋貿易ブームに後押しされて大量の銅銭が中国大陸から日本列島を含むさまざまな地域へ流出していくこととなります。おそらく日本列島はその中でも最も大量の銅銭を吸収した地域であったと考えられるわけです。

【画面14】も大変有名な資料です。ここでは鈴木公雄氏の「出土銭貨からみた中・近世移行期の銭貨動態」というところから表を引用させていただきますましたが、鎌倉期における銅銭づかいというものについては土地売券、それから荘園の年貢、これを現物ではなくて銭納する、銅銭によつて納めるという史料がありますので、大体この二つぐらいが常に引用されているのですが、それらを見ていくと、赤線を引いたところ、明らかに一二七〇年代から土地売券が銅銭によつて決済されている件数が増えているということがわかります。そして一三世紀の後半、銅銭決済が七割から八割に達するという状況が見てとることができるわけです。

あるいは、また、全国から出土備蓄銭が発掘されているのですけれども、一三世紀後半以降のものがほとんどであるということも明らかになっています。そうするとこれは東アジア全体を視野におさめて考えるならば、元の中国大陸の支配、そして交鈔の一元的使用によつて不要になった銅銭が大量に日本列島に流れてきたということを想定しなければならぬだろうということになるわけです。つまり、やはり日本列島もユーラシア全体の好景気の中でおそらく一二世紀から商業化が大いに進展していたと思われるのですが、皮肉なことですけれども日本経済の活性化、それに最後のブーストをかけたのはこの中国大陸から大量にもたらされた銅銭であったということを考えることができるのかもしれないわけです。

ちなみに出土銭の話をしましたので房総の出土銭の話をしておきましょう。【画面15】は小高春雄氏の「発掘調査で出土する銭貨―千葉県内の諸例から―』という論文、そこから引用させていただいているもので

す。典型的な例として一四世紀前期のものと思われる発掘例、それから一五世紀後期の例と思われる発掘例、一六世紀前期と思われる発掘例、この三つを示しておいたわけですが一四世紀前期においては九〇パーセント以上が北宋銭です。時代が時代なので当たり前ですけれども。

つまりこれは一三世紀の後半、中国で不要になった銅銭、それが一三世紀の後半から一四世紀にかけて大量に日本に入ってきて房総半島にもそれが流れつき、そしてそれが備蓄銭として地下に埋蔵されたまま忘れ去られたものであるというふうに考えてもいいのかもしれませんが。ちなみにこの後、一五世紀、一六世紀になると、一四世紀の末に中国大陸で成立した明朝のものと、本格的な貨幣鑄造が一五世紀から進展します。そうするとそれに呼応するようになかたちで房総半島でも洪武銭、永楽銭という明朝の銅銭が現れてくる。そして一六世紀になると四分の一が永楽銭になっていくという現象が現れております。

さて、元から海を渡って日本列島にもたらされたもの、それは銅銭、それから新安の沈没船でもそうでしたけれども大量の陶磁器でした。日本列島では日本独特の、独自の高度な磁器、有田や九谷とかいろいろなもの江戸になると本格的に稼働するようになりますけれども、それ以前においては基本的には中国陶磁器というものが高級品として喜ばれていた時代です。宋・元時代というのはこういった青磁、まあ、日本列島ではなぜか青磁が特に喜ばれたというふうにいわれているようですけれども、青磁が大量に入ってきたわけです【画面16】。ちなみにこれは両方とも鎌倉のもので、右側は鎌倉での発掘品です。左側が円覚寺や建長寺に所蔵されている宋や元時代の輸入品ということになります。

もちろんこの陶磁器も銅銭と同じようにおそらく日本全国にかなり行き渡っていたと思われます。房総においても各地から輸入陶磁器、中世以降の遺跡においては輸入陶磁器というものが少なからず発見されています【画面17】。つまり房総もまた世界的な貿易のうねりの中にあつた



わけです。中国大陸から渡ってきた銅銭や陶磁器というものを受け入れていた、そういう世界の中に当時の房総の人々は生きていたということであります。

最後にもう一つ海を渡ったものについて付け加えておかなければなりません。これは次の川本先生のご講演にかかるテーマということにもなりますが、海を渡ったのはモノとカネだけなのかということなのですが、実は人的交流も非常に活発でした【画面18】。一三世紀というと、一三世紀の後半にはいわゆる元寇があります。元が日本列島に攻めてくるということがありますので、これもひよつとすると当時の中国大陸と日本列島との関係性というのは大変びりびりした、往来の乏しい世界であったのではないかとこのように思われるかもしれませんが、元寇があった

にもかかわらず民間貿易と人の移動というのは相変わらず活発でした。

一方では戦争をやりながら一方では民間貿易船が大量に行き来する。そしてその民間貿易船に僧侶が乗って中国に留学するということが行われていたのが一三世紀から一四世紀の前半です。判明している者だけで日本からの入元僧は二二〇人以上です。古い研究でもそういうふうにいわれておりますけれども、ただ、それは名前が明らかになつていない者だけなので実際にはもっともつとたくさん、三〇〇

人とか、そういう規模でいたのかもしれないというふうに考えられているわけです。

繰り返しますが、例えば古代の遣唐使が日本の文化にとって大変大きな意味を持っていたことは明らかなのですけれども、人的交流の規模という観点からいうならばむしろそれを圧倒的に上回っていたのかもしれない。そして僧侶たちは中国に入ったのち、必ずしもお寺に閉じこもって、俗世界と縁を切って修行だけをしていたわけではなさそうです。

これは榎本渉氏の研究で明らかにされているところなんですけれども、参禅先の中国の僧侶を介して俗人士大夫、僧侶ではない社会の一般的な知識人や官僚たちとの交流関係というものを広げていたのが当時の入元僧たちだったと明らかにされています。当時の僧侶たち、中国に留学した僧侶たちの行動力とネットワークの構築力はなかなかのもので、非常に広範なネットワークを現地で作っていた可能性があるわけです。

この背景にあるのは僧侶のネットワークの構築とそれに基づくある種の社会的な権力です。社会的影響力の行使を是とする発想が当時の社会にはひよつとするとあったのかもしれませんが、僧侶というのは、当時の社会において第一級の知識人、国際人でありますので彼らが単に自己の悟りを追及するのみではなく、当時の東アジア世界を代表する知識人として現実のこの俗世界の社会の安定、そういうものに関しても責務があるのだという発想をひよつとしたら持っていたのかもしれない。ただ、この点はまだまだ今後の研究に委ねられるべき領域かもしれません。

おわりに — 千葉氏・禅宗・東アジア

さて、無事になんとか千葉までたどりつきました。ようやく最後に千葉氏であります。中世を生きた千葉氏、流通と貨幣経済の驀進というふうに書きましたけれども、繰り返しますが一三世紀というのは世界的な商業化の波にあらわれていた時代です。一カ所に引きこもって自給自足

の生活だけをしていたという世界ではおそらくなかったのかもしれないのです。そうするとそのような流通と貨幣経済の中を生きた千葉氏についてどのように考えていったらいいのかという問題が出てくるだろうと思います。

これについて、私は中国近世史が専門なので実証的に何かを言う資格はないのですが、例えば野口実氏、あるいは本郷恵子氏といった日本中世史の専門家の意見をここで聞いておきたいと思えます【画面19】。例えば野口氏は「自身の研究をいくつか要約しつつ今後の千葉史研究の課題ということでこのように述べておられます。列島各地に散在する所領をネットワーク支配する都市的荘園領主的存在としての千葉氏の側面、これに注目していく必要があるだろうということをおっしゃっておられます。それから本郷恵子先生。過剰なまでの消費、蕩尽するという表現を本郷先生は使っておられますけれども、その社会の中で全国に散らばる多くの拠点を結んで多くの人が移動し、情報や物資をやりとりしていた千葉氏の状況というものを紹介されています。

この野口氏、それから本郷氏の示唆するところによるならば千葉氏も含めて一カ所で自給自足的に自足していたわけではなく、むしろ日本全国に広がるようなネットワークというものを持ち、その情報網、それから金融網の中で活動をしていたということを考えなければならなくなるだろうということになります。

千葉氏からも何人か中国に渡った僧侶が出ています。その一人、先ほど外山先生のほうからご紹介がありましたけれども了行という人物、これが本郷恵子先生によって紹介されています。ちょうどその一三世紀の半ばです。閑院内裏造営を指揮した千葉氏出身の僧、了行という人物がいて、これは大変なやり手であって、これは本郷氏の言葉をそのまま引用しますと、千葉氏と京都貴族社会の両方に人脈を持ち、宋で最新の知識や知見に触れた人物、として了行を紹介しておられます。仮にもう一

つここで付け加えるならば、千葉氏と京都貴族社会の両方に人脈を持つ、さらに中国関係者、つまり日本に拠点を置きながら中国と往来する貿易商人たち、それから中国の僧侶や政治家たち、知識人たち、そういう人物たちともネットワークを持っている、そのような人物であると言えるでしょう。そして政治的にも大変有能で、内裏の造営を任されるというような活動を千葉氏出身の僧侶がやっていたということが明らかにされているわけです。そうなるとおそらくこれからの課題だと思えますけれども禅僧、あるいは僧侶というものの社会的な存在形態、これについて改めて実証的に深めていく必要があるのかもしれない。

繰り返しになりますが、それは単に仏教の修行をしていたというだけではなく、当時の一流の知識人、国際人であって、場合によっては政治家である。そのような側面を持ち、出身母体である一族とも何らかの関係性も維持しているような存在。そうしたものとして考えなければいけないのかもしれない。

さて、そろそろ終わりに入りたいと思います。ここまで主に一三世紀の話をしてきました。最初のハーメルンの笛吹き男から始まって前の画面の了行まですべて、ほぼ一三世紀の話をしてきたわけです。そうするとその次です。それからの時代である一四世紀から一五世紀にかけてはどうだったのかということをごく簡単に触れておきたいと思えます【画面20】。

一四世紀というのはユーラシア全域を眺めると一四世紀の危機といわれる時代を迎えています。いったいこの一四世紀の危機って何だったのかということなのですが、一〇世紀から一三世紀にかけて非常に温暖で生産力の上があった時代というものが終わって、一四世紀は寒冷化したのではないかといわれています。一四世紀のユーラシアの寒冷化に伴って一四世紀の半ばになるとヨーロッパや中東などの地域でペストが大流行します。ヨーロッパでは人口の三分の一が死んだとまでいわれるような



惨禍がおとずれるわけです。

そうすると今度は人口が激減し商業化が収縮する、ユーラシア全体で商業化が蹶跌する、止まってしまおうという現象が発生したかもしれない。そして時を同じくして一四世紀、あれほど強大な、ユーラシア全域を覆ったモンゴルがばらばらに解体していくわけです。商業化の帝国の終わりが訪れる、それが一四世紀の危機の時代でした【画面21】。

当然、これは東アジアにも何らかの影響をおよぼさないわけにはいかなかったでしょう。最初に申し上げましたようにお米というのは大変ありがたい作物で、生産力が高く連作が利くということで、東アジアでは寒冷化によってもヨーロッパのような深刻な大打撃は一四世紀の後半にも見られてはおりません。そこまで深刻な被害というものがあつたよう

に古文書からはうかがいがい知ることができないのですが、ただし中国大陸を見ると明らかに商業の収縮という現象に対応する諸政策というものが見られます。

一四世紀の後半、中国大陸に成立した明朝というのはある種の抑商政策、商業化の抑制を行い、厳しい海禁政策を敷き、貿易を事実上ストップさせます。これは単純に明の洪武帝が商業を嫌った復古主義者であつたといふことではなく、同時にそうせざるを得ないという状況が中国大陸に存在していたと見るべきであらうと思います。商業よ

りもまずはとにかく自給することというのが重要な課題になるような、そのような歴史の転換点、明朝はそこに成立したというふうに見えるべきだろうと思います。

したがって、一四世紀の後半には日本列島への銅銭や陶磁器の流入がたぶんなくなります。考古学的に見ても一四世紀後半の地層から出土する陶磁器、銅銭は急激に減少するということがほぼ明らかにされています。これが復活するのが一五世紀に入ってからです。一五世紀になると明の第三代永楽帝によって貿易が容認され、再び日本列島に永楽銭などが流入するようになっていくわけです。こうして一六世紀、今度はまた世界的な好景気がおとずれることとなりますが、そこまでは今回は視野の外ということになりますので、次のこの好景気と動乱の時代を千葉氏がどう生き延びていったのかということについてはいはずれまた何らかのかたちで追っていくことができればというふうに思っております。ということで、前座としての世界的環境の中の房総ということでの私の話はここで終わりにさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

中世東アジア世界の中の房総・千葉氏

2021年12月11日 千葉市・千葉大学公開市民講座
千葉大学人文科学研究院 山田 賢

はじめに—13世紀～15世紀頃における歴史的変動と共振

アジア・ユーラシア世界の中の東アジア世界、東アジア世界の中の日本列島
そして日本列島の中の房総・千葉氏
房総・千葉氏の背景にある広域地域史の研究史的再確認

I. ハーメルンの笛吹き男—11～13世紀ユーラシアの商業化

阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』の描く13世紀のヨーロッパ
人口増・人の移動→膨張するヨーロッパ
11世紀頃からの温暖な気候と農業生産の増大、商業化の進展

II. 新安沈没船—13世紀から14世紀前半期の東アジア世界

日宋貿易から日元貿易へ：東アジア商業化の時代
1975年、朝鮮半島南部、新安沖で発見された沈没船
2万点以上の陶磁器、28トンの銅銭を積載
中国大陸と日本列島の間の人・モノの移動
13世紀後半：南宋の滅亡と銅銭の流入→日本経済の画期
14世紀前半：「元寇」を経ても活発な貿易と渡元僧の留学

III. 死の舞踏—「14世紀の危機」と商業化の退縮

ユーラシア西部におけるペスト大流行と商業化の退縮
元の崩壊と明朝の成立（1368年）
厳しい海禁政策による海洋貿易の衰退→15世紀の日明貿易再開へ

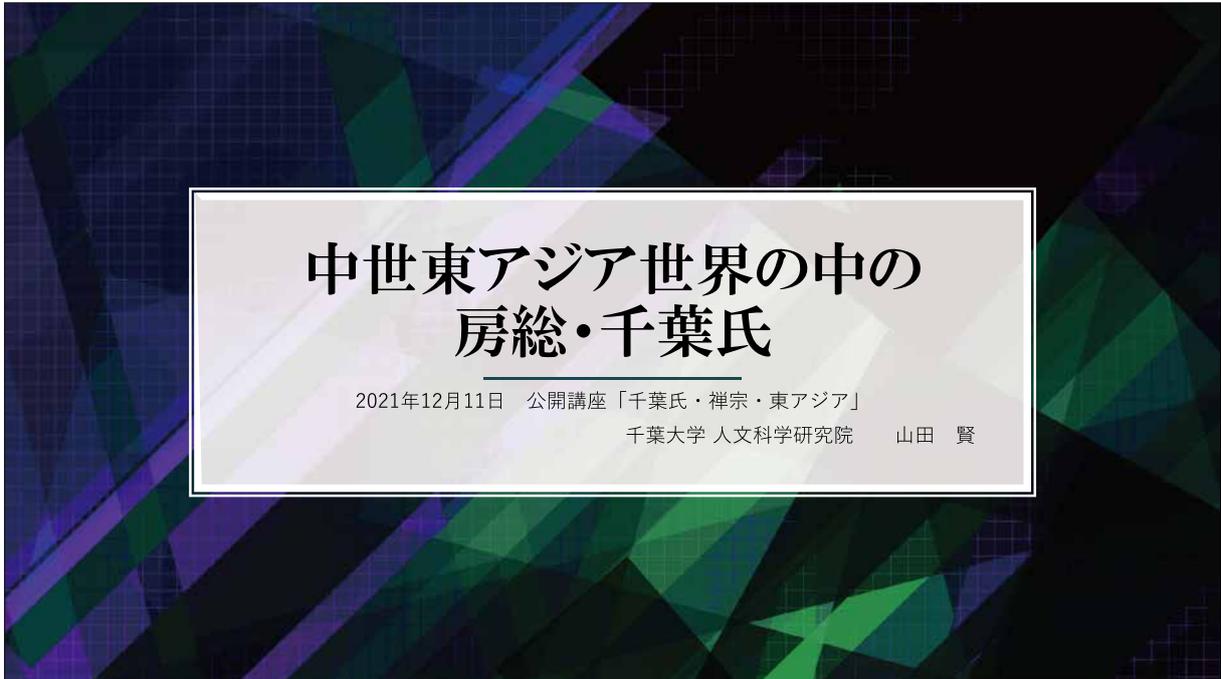
IV. そして日本列島と房総

13世紀後半以降の銅銭の大規模な流入
貨幣・商品の列島規模の流通→日本全国から出土する宋銭・中国陶磁
列島規模の経済的ネットワークの想定
海運の要衝のひとつとしての房総

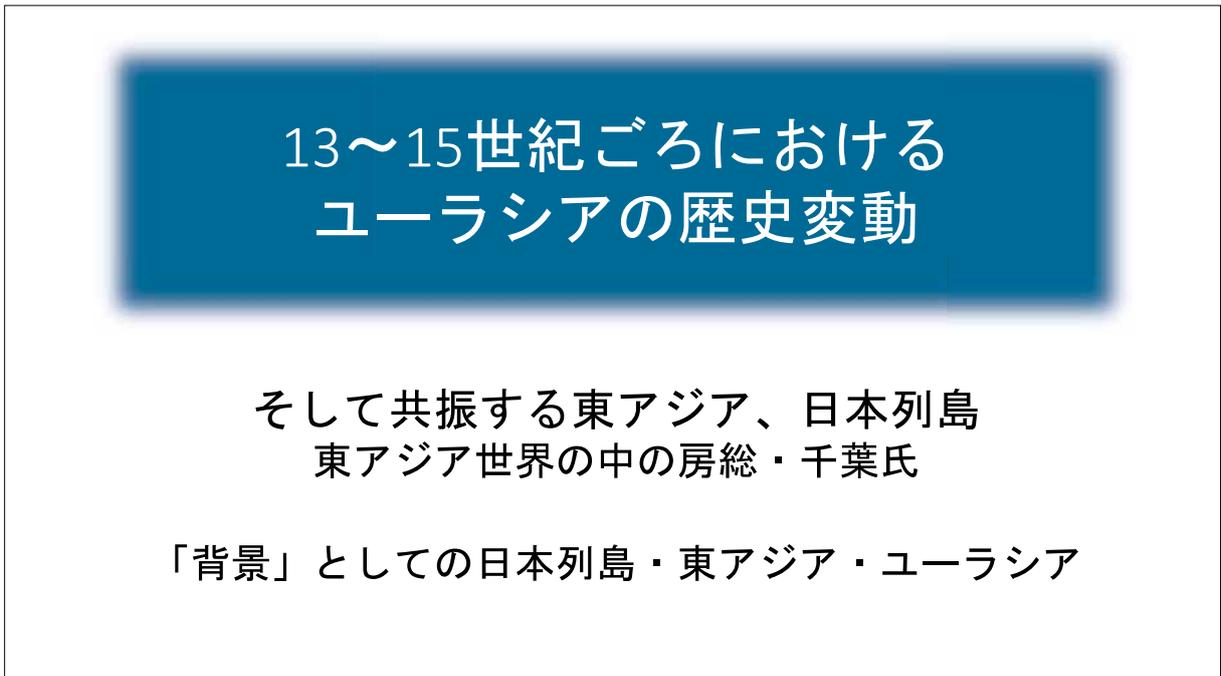
おわりに—千葉氏・禅宗・東アジア

中世千葉氏の時代
さまざまなネットワーク：千葉氏・商業化・日元貿易・禅僧

画面1



画面1



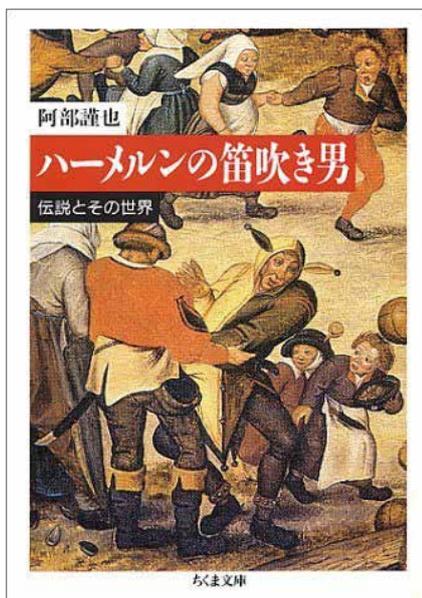
画面3

中世ヨーロッパ・ハーメルンで起きた1284年の事件の記憶



マルクト教会のガラス絵から模写した現存する最古の〈ハーメルンの笛吹き男〉の絵（1592）
阿部謹也『ハーメルンの笛吹き男』平凡社、1974年、より

画面4



ハーメルンの笛吹き男

伝説の背景にある中世の世界は？

※示唆される背景

- ・11世紀以来の人口増加
- ・ハーメルンの切実な土地不足
- ・進行する商業化
- ・「移住」という生計戦略
- ・「東方植民」の時代

前掲、阿部謹也1974をちくま文庫（筑摩書房）として1988年に再刊

画面5

10～13世紀 ユーラシアの西・ヨーロッパはどんな時代だったか？

温暖な気候⇒生産力の上昇⇒商業化・人口増

- ・発展する都市と商業ネットワーク
- ・農村から溢れ出し移動する人々

好景気としのぎを削る資源争奪戦
熱気に満ちた不安定な社会
ユーラシア全域を巻き込む商業化の時代

膨張するヨーロッパ

画面6

11～12世紀ごろの世界状況

世界的な温暖化と生産力上昇、商業化の進展

ユーラシアの西

農業生産力の上昇と**人口増・商業化**
ヨーロッパの膨張
(十字軍・東方植民・レコンキスタ)
地中海貿易の繁栄
ベネチアとカイロの繁栄
インド洋⇒紅海⇒地中海への貿易路

ユーラシアの東

農業生産力の上昇と**人口増・商業化**
中国大陸の周辺で自立化する諸勢力
(遼・西夏・金・日本列島(平氏など))
※武人政権・「国風文化」・貿易
中国の港市、寧波(明州)の繁栄
シルクロード・草原の道から陶磁の道

ユーラシアをつなぐ商業化

13世紀 東と西をつなぐモンゴルの時代へ

画面7

福井憲彦ほか『世界史B』東京書籍、より

○「陶磁の道」
(三上次男『陶磁の道』(岩波新書)岩波書店、1969年)
活性化する東西の交易：海を渡って広域ユーラシアに伝播する中国陶磁

④10～11世紀の世界の諸海域と海の交通路 (中国陶磁の出土分布は青柳洋治による)
写真は中国の青磁。また、元代には、中国にイスラーム世界からコバルト顔料がもたらされ、イロハ染付 (→p.228) とよばれる陶磁器は、重要な輸出品となった。

画面8

11～12世紀の商業化から モンゴル帝国の13世紀へ

ユーラシア東西をつなぐの交通網の整備
人・モノ・カネの大規模な移動

商業化の帝国としてのモンゴル？

海を越えて日本列島に渡る陶磁器と銅銭

画面9



画面10



画面11

「商業化の帝国」としてのモンゴル

マルコポーロ 元朝の紙幣（「交鈔」）について
カンバルック市（大都）にカーンの造幣局がある・・・まずクワの樹といっ
て、その葉はカイコの餌になる一種の植物の樹皮を剥がしてくる。・・・こ
れを細かく裂いて膠を加え糊のように搗きませた末、これを紙状に引き伸ば
す。・・・紙片ができあがると、これを様々な寸法に裁断するのだが、どれ
も縦が横幅より長い長方形をなしている。
・・・こうして作成された通貨はどれも純金や純銀の貨幣と全く同等の権威
を付与されて発行される。・・・紙幣ができあがると、カーンは一切の支払
いをこれで済ませ、治下の全領域・全王国にこれを通行せしめる。・・・
人々はどこへ行こうとこの紙幣で万事の支払いができる。・・・なんでも買
い求め、支払いの段にはこの紙幣を用いるのである。しかし10ペザントの
価値に相当する紙幣でも、その重量は1ペザントにも達しない。

マルコポーロ、愛宕松男訳注『東方見聞録』（平凡社、1970年）より

交鈔 ⇨ 「商業化」と「移動」の時代に好適

画面12



「交鈔」

クビライの時代

- 1260年 「中統元宝交鈔」の発行
- 1276年 南宋の都、臨安を占領
- 1277年 江南地方における銅銭使用の禁止
- 1279年 南宋の滅亡
- 1280年 江淮地方における銅銭使用の禁止

※紙幣の「交鈔」一元化への志向

至元通行宝钞：中国銭幣博物館蔵

「不要」になった銅銭のゆくえ

民間では、お上（「公家」）で銅銭を用いなくなったことを見て、銅銭を蓄蔵していた家では、往々にして勝手に値をつけて、**海外に出る商船（「下海商船」）に売り払ったり**、あるいは鍛冶を生業とする家では、銅銭を溶かして日用什器を作るなどした。こうして歴代の貴重な宝貨であったものが、かえって民間の私利を図るものとなったのである。

1285年の状況：程文海『雪楼文集』巻10、銅銭、より



13世紀後半、海洋貿易ブームに後押しされ
大量の銅銭が、中国大陸から海外へ流出

表2 中世土地売券における米・銭・絹布の
支払い変遷（鎌倉遺文による）

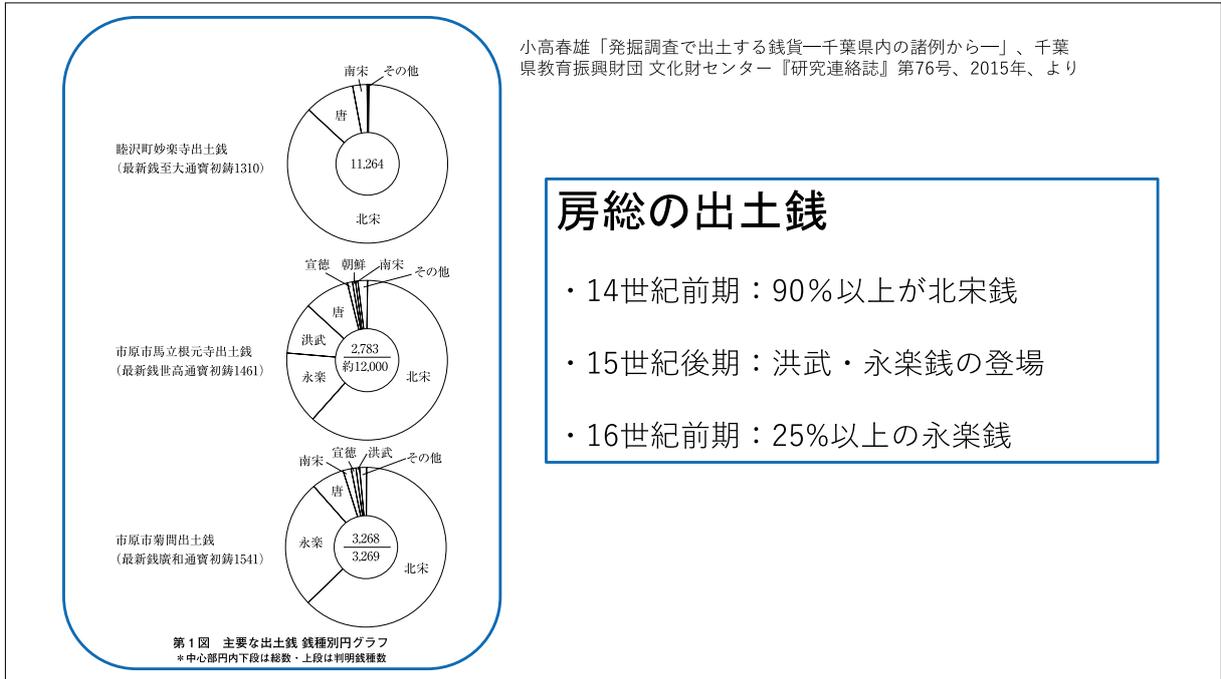
件数	年代		%			
	米	銭	絹・布	米	銭	
5	65	10	1185~	6.25	81.25	12.50
4	44	10	1200~	6.90	75.86	17.24
6	70	29	1210~	5.71	66.67	27.62
5	85	66	1220~	3.21	54.49	42.31
3	106	71	1230~	1.67	58.89	39.44
1	56	42	1240~	1.01	56.57	42.42
	39	68	1250~		36.45	63.55
	53	71	1260~		42.74	57.26
	59	118	1270~		33.33	66.67
	56	119	1280~		32.00	68.00
	43	105	1290~		29.05	70.95
	52	126	1300~		29.21	70.79
	45	135	1310~		25.00	75.00
	20	81	1320~		19.80	80.20

鈴木公雄「出土銭貨からみた中・近世移行期の銭貨動態」
歴史学研究会編『越境する貨幣』青木書店、1999年、より

- ・土地売券、荘園年貢代銭納など、さまざまな指標に現れる1270年ごろの画期
- ・ほぼ全国に及ぶ出土備蓄銭（13世紀後半から）
- ・以前とは比較にならない量の銅銭が、にわかに全国的に流通し始める13世紀後半の「異変」
- ・元の中国大陸支配と「交鈔」の使用によって大量の銅銭を受け入れた日本列島*

* 大田由紀夫「12-15世紀初頭東アジアにおける銅銭の流布」、『社会経済史学』61-2、1955年、の先駆的な指摘

画面15



画面16



画面17

房総各地から出土する輸入陶磁



1 外貨輪遺跡より出土した貿易陶磁器(財団法人君津都市文化財センター提供)
千葉県史料研究財団編『千葉県の歴史』(資料編 中世1)、1998年、より

画面18

海を渡ったのはモノ・カネだけか？ 元に渡る禅僧たち

判明しているものだけで日本からの入元僧は220人以上、実際はもっと多数

入元僧たちの行動：参禅先の中国僧を介して広がっていく俗人士大夫との人脈
(榎本涉「入元日本僧椿庭海壽と元末明初の日中交流」、『東洋史研究』70-2、2011年)

→ネットワークの構築と社会的影響力の行使を是とする発想

画面19

東アジア・禅宗・千葉氏

中世を生きた千葉氏：流通と貨幣経済の驀進

野口実氏の研究：列島各地に散在する所領をネットワーク支配する都市的・荘園領主的存在としての千葉氏

(野口実「千葉氏研究の成果と課題」、野口実編『千葉氏の研究』名著出版、2000年)

本郷恵子氏の研究：過剰なまでの消費（「蕩尽」）する社会の中で、全国に散らばる多くの拠点を結んで、多くの人々が移動し、情報や物資をやりとりしていた千葉氏の状況

※13世期半ば、閑院内裏造営を指揮した千葉氏出身の僧「了行」：「千葉氏と京都貴族社会の両方に人脈を持ち宋で最新の知識や知見に触れた人物」

(本郷恵子『蕩尽する中世』（新潮選書）新潮社、2012年)

画面20

それから 「14世紀の危機」から15世紀へ



ミヒャエル・ヴォルゲムート「死の舞踏」
1493年、版画

「14世紀の危機」

寒冷化する14世紀のユーラシア
14世紀半ばにおけるペスト大流行
(ヨーロッパ・中東などの地域)

人口の激減→収縮する商業化

解体する商業化の帝国

画面21

おわりに 14世紀から15世紀の東アジア

14世紀後半

元の滅亡と明の成立
明成立初期の抑商政策？
明・洪武帝の厳しい「海禁」政策
日本列島への銅銭・陶磁器流入の停止

15世紀後半

永楽帝期における貿易の容認
再び日本列島に流入する銅銭（永楽銭などを含む）
やがて16世紀の好況へ

画面22



ご清聴ありがとうございました。

【講演2】

千葉一族・白井氏と五山文学

川本 慎自（東京大学史料編纂所・准教授）

講師紹介

川本 慎自（東京大学史料編纂所・准教授）
かみもと しんじ

岡山県出身。東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了。東京大学にて博士（文学）の学位を取得。東京大学史料編纂所助教などを経て現職。

気鋭の禅宗史研究者として五山文学や禅僧の知識・学問など、禅宗を中心に据えて中世の文化について意欲的に研究に取り組んでいる。千葉大学でも講義を担当した。

著書は『中世禅僧の儒学学習と科学知識』（思文閣出版二〇二二）、共編著として『空華日用工夫略集の周辺』（義堂の会 二〇一七）がある。論文は「夢窓派の応永期」（アジア遊学『室町前期の文化・社会・宗教』『三國伝記』）を読みとく』勉誠出版 二〇二二）ほか多数。本講演に関する論文として「道庵曾頭の法系と関東禅林の学問」（『東京大学史料編纂所研究成果報告 日本中世の「大学」における社会連携と教育普及活動に関する研究』二〇二二）がある。

ご紹介いただきました川本と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。本日は千葉氏の公開講座ということで、千葉一族に非常に詳しい

皆さまがたくさんいらっしやるかと思ひましてちよつと緊張しておりますが、どうかお手柔らかにお願いいたします。一方で、この千葉で講演させていただくというのを非常に光榮に思っているところもあります、ただいまご紹介いただきましたとおり、私は今は都内に住んでいるのですが、実は実家が美浜区でありまして、「ご実家どちら？」と聞かれて「美浜区です」と答えてもたぶん都内の人はわかってもらえないだろうなと思つて、いつもは「幕張メッセの近所です」みたいなことをごによごによと答えたりしているんですけども、今日はもう自信を持つて「美浜区です」とか、「検見川浜です」っていうふうに答えても十分わかっていただけるんじゃないかなと思ひまして非常に楽しみにしてまいりました。どうぞよろしくお願ひいたします。

とはいえ千葉に住んでいたといひしても、千葉氏について専門に研究しているわけではなく、実は専門に研究しておりますのは、ただいまご紹介いただきましたとおり、中世の禅宗寺院についてでありまして、主には鎌倉の円覚寺や建長寺のあたりのことを勉強しております。そこで今日は千葉一族と禅宗寺院の関係をお話しさせていただきたいと思つております。

千葉一族とお寺といひますと、何よりも、今日の山田先生のお話でも何度か出てきました千葉寺が思い浮かぶと思ひますが、千葉寺はご承知



のとおり真言宗、密教の寺院ですので禅宗ではないわけですね。あるいは千葉一族と禅宗といえますと、下総、香取のほうで東氏からたくさん禅僧が出ていたので、そちらと関係があるということをご存知の方がいらっしゃるかもしれません。今日は千葉寺でも、東氏でもなく、白井氏という一族、これは千葉一族ですけれども、白井と禅宗が関わりがあるんだということ、ちょっと意外なところからお話しさせていただきたいと思っております。先ほどの山田先生の世界スケールの大きな話から比べますと、きわめてローカルな世界といえますか、千葉市と佐倉市で、あるいはちよつと八千代市が入るかなという、半径一〇キロぐらいのお話になるんですけれども、しばらくお付き合いいただければと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに

さて、一口に禅宗寺院といいますが、皆さんの中にもさまざまなイメージがあるかと思えます。真つ先に思い浮かぶのは、やはり禅といえますと座禅のイメージだと思うのですが、その他にも庭園や水墨画といった美術のイメージ、あるいはお茶と関わっているイメージ、あるいは、漢詩・漢文との関わりということを思い浮かべる方がいら

っしゃるかと思えます。あるいは精進料理なんていうのもあるかと思えます。こうした室町時代に端を発するようなさまざまな文化と禅宗というのに関わりを持つているというのをご承知のとおりかと思えます。

ここで、今日注目したいのはその中でも「詩画軸」と呼ばれる美術作品です。【画面2】にお出しいたしましたように、簡単にいえば水墨画の上に漢詩・漢文を記したものの、つまり詩と画を一つの軸におさめたもの、これを詩画軸というふうになっております。中世、特に室町時代以降の禅宗寺院で非常に盛んに作られたものなんです。一番有名なものでは『瓢鮎図』という作品が思い浮かぶかと思うのですが、瓢鮎で鮎を捕まえるにはどうしたらいいかということを書いた詩画軸です。室町幕府の四代將軍足利義持の周りにいろんな禅僧たちが集まっています、そこで將軍があるときお題を出すわけですね。「瓢鮎で鮎を捕まえてみなさい」というようなとんち話、お題を出して、それに対してその將軍の周りに集まっていた禅僧たちが、絵と漢詩、それぞれの立場から答えを出すわけです。

スライドでいくつか詩画軸というものを見ていきたいと思います。今出しておりますのは『竹斎読書図』という作品になりました、東京国立博物館にある作品で、常設展示にときどき出ているのでご覧になった方もいらっしゃるかと思えます。これはどういうものかといえますと、京都の南禅寺のお坊さんがこの一番下の絵の部分を持っていたんですね。それに対して南禅寺だけではなく、京都の相国寺ですとか建仁寺ですとか、色々なお寺のお坊さんたちが上のほうに、これが漢文、そして下に漢詩という感じで、漢詩・漢文をたくさん寄せていくというような作りになっています。

それからもう一つ、【画面3】も東京国立博物館所蔵の『芭蕉夜雨図』

と呼ばれる作品でありまして、こちらもさまざまなお坊さんが漢詩を寄せているんですけども、こちらの場合はお坊さんだけではなく、たまにこの作品が作られたときに朝鮮半島から外交使節がやって来ていて、その人にちやうど京都にいたんで書いてくださいということでお願ひして書いてもらったというものがあつたりします。

先ほどの山田先生のお話とも関わると思うんですけども、やはり当時の東アジアの外交というのは、漢文でやりとりをするので、外交使節として日本にやって来る人っていうのはとにかくにも漢文書けなきゃやっていけないわけで、だから書いてくれと言われればすぐ漢詩を作るわけですね。それから左上の部分、これは山名時熙という守護大名が書いているんですね。これは但馬とか備後とかの大名でありまして、応仁の乱の一方の大將だった山名宗全のお父さんにあたる人です。ですから応仁の乱よりもちよつと前の作品ということになります。

このように、この詩画軸という作品には、禅僧だけではなく、その周辺にいた武士ですとか、あるいは外交使節も漢詩を寄せているという、そういう非常に広がりを持った作品であつたということがよくわかるわけです。

作品の解説をし出すと時間がいくらあつてもきりがありませんのでこのぐらいにしておきますが、見ていただきますと絵の比重が意外に小さいといえますか、絵はもうほんのちよつとだけで、むしろその上の漢詩・漢文のほうが大きな面積を占めているということがわかるかと思ひます。もちろん面積で決めつけちゃうのはどうかと思うんですけども、漢詩・漢文が重視されているということを感じておいていただければと思います。

さて、今までご覧にいられた作品というのは主に京都の禅宗寺院で作ら

れたものでした。ではここからいよいよ関東のほうに話を移していきたいと思ひますが、これらの詩画軸は関東では作られることはなかったのでしょうか。実は関東でも作られていたんですね。鎌倉の禅宗寺院、円覚寺や建長寺でもさかんに作られていました。ただし時期がちよつと違ふんです。京都での詩画軸の流行というのは、先ほどもちよつと見ましたとおり、応仁の乱よりも前、つまり室町時代ぐらいが京都での詩画軸の流行のピークだったのですが、鎌倉の場合は少し遅れます。むしろ応仁の乱よりも後、戦国時代に最も最盛期を迎えることとなります。鎌倉の円覚寺や建長寺での詩画軸の流行、これをもたらししたのは実はある一人の画僧、建長寺にいた祥啓しやうけいというお坊さんだったんですね。このお坊さん、いわゆる画僧と呼ばれる人で、絵を描くお坊さんということになります。有名な雪舟よりも少し後の世代になるんですけども、この祥啓という人は、鎌倉の建長寺から京都の相国寺に絵の修行に行くんですね。そして京都で水墨画の最新の技法を学んで帰ってきました、その京都で学んできたことの中に、詩画軸という絵と漢詩を一つの軸の中に記す総合芸術みたいなものも含まれていたわけです。

具体的に京都からどういふふうに関東に鎌倉を持ち帰ってきたのかというのがよくわかる史料がありますのでちよつと見てみたいと思ひます。【38 ページ】に『観瀑図』という詩画軸の作品があります。

これは祥啓が鎌倉から京都に絵の修行に行つて、絵の修行が終わつていよいよ帰るといふときに、京都での絵のお師匠さんだった芸阿弥という人がお別れにお土産にくれた、そういう作品なんです。しかもその作品というのが、ただ絵を描いただけではなく詩画軸になつていて、上に漢詩・漢文がついているので、どういふ場面でどういふふうにお土産としてもらったのがよくわかるというものです。要するにお別れの寄

せ書きみたいな感じの上で書いてもらったわけです。その寄せ書きの書いてもらった内容というのを【画面4】で読み下しをお見せしながら簡単に読んでみたいと思います。これが『観瀑図』という詩画軸の上のほうに書いてある寄せ書きの内容で、横川景三おうえんけいさんという京都の相国寺のお坊さんが書いたものになります。

まず一文目、「相陽の啓上人、絵事に遊ぶ者なり」とあります。相陽というのは相模の中心部ですから要するに鎌倉ってことですよ。鎌倉の啓上人、祥啓。お坊さんの名前は下の一文字だけをあげて呼ぶことがわりとよくあるんです。ですから鎌倉の祥啓という人は絵のことに遊ぶっていいですけども、絵のうまい人だということ言っているわけですね。そして戊戌の歳、これが文明十年（一四七八）ということになります。応仁の乱が終わったか終わらないかっていうそんな時期ですね。ここに「観光して」とありますけれども、いわゆる現在でいうところの観光とはちょっと違って、諸国をいろいろ見て歩いて学ぶというような雰囲気ですかね。

そして、京都に上ってきて、「国手芸阿に就きて画を学ぶ」というんです。国手というぐらいですから国一番の名手ということですかね。この芸阿弥という人はどういう人かといいますと、將軍足利義政の側近で、もちろん本人も絵を描く人ではあるんですけども、同時に將軍の持っているさまざまな美術作品を管理する、そういうような役割も果たしていた人なんです。ですからそういう人のところに弟子入りして修行するっていうことは、絵の描き方を教えてもらえるっていうのはもちろんなんですけれども、それだけではなく、將軍の持っている古今東西の美術の名作が見放題であるということになるわけですね。そういう意味では絵の勉強をするには申し分ない環境だったわけですね。そういうところに

この鎌倉の建長寺のお坊さん、祥啓という人は京都に行つて弟子入りしたわけですね。

さらに次の行ですね、「一日別れを告げて里にかえる、芸自ら軸に画し、もつてその行を餞す」と言っています。ある日、別れを告げて里に帰る、つまり絵の修行を終えて鎌倉に帰りますと別れを告げてきたんですね。そこでお師匠さんの芸阿弥が自ら軸に絵を描いて、それをはなむけにしてくれたんだと言っています。そして次の行にはこの絵を描いてくれた理由があるんですね。単に国に帰るのでお土産にくれたというだけではなくて、「意は芸に得たるを証するにあるのみ、よみすべき」、その意図は、芸に得たる、芸阿弥のところ得たもの、芸阿弥に習ったことを証明するためのものであるんだと言っています。つまりお師匠さんが弟子に対して、お前の学習したことはこういうものなんだっていうことを証明するためにこの絵を渡すんだっていうふうに言っています。

つまり、免許皆伝の証として、もうお前に教えることはすべて教えたんだというようなものとして、この詩画軸『観瀑図』というのを与えたと言っているわけですね。そういう話を聞いたと、この寄せ書きを書いた横川景三という人は書いているわけですね。そのうえで最後に、「月翁げつとう、蘭坡らんば、詩をその上に題す、これを書し、後に列す」と言っていますので、横川景三と月翁と蘭坡、三人のお坊さん、これは京都での絵の修行中に親しくなったお坊さんですが、この三人が漢詩を絵の上に書いた、寄せ書きをしたというわけですね。そういう趣旨説明文のようなものがこの『観瀑図』の上のところにかいてあるわけですね。というわけでこの『観瀑図』は、まさに京都から鎌倉に詩画軸という芸術が伝わってくるその瞬間を明かしている作品であったりするわけなんです。

そうして水墨画の技法、詩画軸というものを携えて鎌倉に戻ってきた



祥啓は、当然、京都でせっかく学んできたんで鎌倉でも詩画軸を作ってみようということになるわけですね。ところが祥啓という人は、画僧ですので水墨画を描くのはすぐに申し分なく作れるわけですから、詩画軸というものを作るためには、先ほども言いましたとおり、絵だけがあっても詩画軸は成立しないわけです。上にこのたぐさんの漢詩がなければ詩画軸というのが成立しないわけです。漢詩を詠める人をたくさん用意しないと詩画軸は作れないということになります。ところがちょうどうまいことに、この戦国時代の初めごろ、ちょうど同じ時期に、鎌倉の円覚寺や建長寺には漢詩の名手といわれるお坊さんが何人も存在していたんですね。その人が玉隠英瑠、竺雲顛騰というお坊さんなんです。

玉隠英瑠、竺雲顛騰が詩を寄せた作品として、たとえば『柿本人麿像』など、たぐさんのものが残されています。本当にたまななかどうなのかわかりませんが、彼らが祥啓と同時期に円覚寺や建長寺にいたものから、同時期に絵を描く人、それから漢詩を作る人、両方いたということ、鎌倉、関東でも詩画軸というものが作ることができ、盛んに作られるようになったということになるわけです。水墨画と漢詩、奇跡のコラボというわけで鎌倉に詩画軸という

ものが伝わってきました。

さて、ここまで水墨画を描いた祥啓という画家のほうのお話を中心にお話してきましたので、祥啓がどうやって絵を学んできたかについての話はよくわかりただけかと思えます。ではこっちの、上のほうですね、漢詩を作る人たち、この人たちはいったいどうやって漢詩を作ることを学んだんだろうということを考えてみたいと思います。漢詩・漢文を作るということは、結局中国の言葉や事柄の知識が必要になってくるわけです。これは室町時代や戦国時代に普通に日本で生活していたのではなかなか身につくものではないですね。現代ですと、高校の国語では漢文の授業がありますから一応最低限漢文の知識は学びますけれども、では漢文書いてみると言われたら結構大変だと思っんですね。ましてや漢詩を作ってみなさいと言われたらちよつと無理じゃないかなと。現代人でもそんな具合ですので、室町時代、戦国時代の人たちもやはり漢詩を作るといことはどこかで専門的に学ばなければならなかったと思うわけなんです。ではそれはいったいどこでどのように学んだんだろうということを考えてみようというのが今日のテーマですね。「千葉氏・禅宗・東アジア」というところと関わってくるということになってまいります。

さて、まずその漢詩を書いた人というのがどういう人だったか。先ほど名前をいくつか挙げましたけれども、竺雲顛騰という人を中心に考えてみたいと思います。【画面5】で出していますのは「法系図」といいますが、漢詩を書いたお坊さんの師弟関係を、お師匠さんからお弟子さんに棒線（ぼうせん）を引いてつなげたものです。【40ページ】にも載せてあります。漢詩を書いたお坊さん、どんな人がいたのでしょうか。先ほど名前を挙げました竺雲顛騰という人、それからその後、用林顛材（ようりんけんざい）という人、この

人もさまざまな詩画軸に名前を残しています。それからちやくしゆくけんりよう籌叔ちやくしゆくけんりよう頭良という人、この人もいろいろ漢詩・漢文を作っているということで名前が残っています。

こうした漢詩・漢文を作る人たちが、師弟関係の図に並べてみると実は一つの師弟関係だったりするわけですね。この竺雲頭騰という人は用林頭材の直接のお師匠さんじゃなくて、用林は兄弟子の弟子ということになりますから、親子関係みたいな言い方をすれば甥っ子ということになるわけですよ。ほぼ一つの師弟関係、つまり一門の中に漢詩を作る人たちが何人も出てきたということになるわけです。

ここでこの漢詩を作る人たちの名前に注目していただきたいのですが、この名前の、特に三文字目を見てください。**【画面5】**では今赤字になりました。ここで挙げた人たちは名前の三文字目に「頭」という字を共通して持っています。これは系字と言いますが、禅宗のお坊さんですと特に師弟の間で同じ文字を受け継いでいくということがあるんですね。ここで、この「頭」という字を受け継いでいく法系の人たちが漢詩・漢文を作る人たちの一派ということになるらしいということになります。

ではこの一派をさかのぼっていくとどういってお坊さんにたどりつくのかといえますと、一番最初に見えますのがこの高峰こうほう頭日けんじつというお坊さんになります。高峰にはぶつこくこくし仏国師ぶつこくこくしという諡号がありますので、この一門を仏国派と呼んでいます。ただし、高峰頭日のお弟子さんにはむそうそせき夢窓疎石むそうそせきなどたくさんのお坊さんがいますので、この**【画面5】**はその中でもごく一部を抜き出した図ということになります。この高峰頭日は、今日のこの講演会のポスター、チラシの写真にお像が載っていますね。

さて、この漢詩を詠む、「頭」という字を持っているお坊さんたちの、

この「頭」という字がどこから出てきたかということを考えてみますと、そもそもの根源は高峰頭日の頭にあると思いますが、どこからこの「頭」という字を受け継ぐようになっていったかを見てみると、このどうあんそうけん道庵會頭どうあんそうけんという人から始まっています。この後の代々の人たちからこの「頭」という字を嗣ぐようになったと考えられます。つまり漢詩・漢文を詠むお坊さんたちの一門の始まりの位置に、この道庵會頭が位置しているということがこの系図でわかるわけです。この道庵會頭は南北朝時代の人です。先ほどの山田先生のお話は十三世紀が中心でしたが、その後にく一四世紀ごろ、南北朝時代にさかのぼってお話していきたいと思います。

一 道庵會頭と白井氏

① 『千葉白井家譜』の「道庵和尚伝」

というわけです。いぶん時間を取ってしまいましたけれども、ようやく本題、第一章のお話に入りたいと思います。ここまでお話ししてきましたとおり、鎌倉五山の漢詩・漢文を詠むお坊さんたちの起点にあたるのがこの道庵會頭ですが、こんなような方です**【画面6】**。これは、佐倉市羽鳥の浄光寺にあります道庵會頭のお像です。こうやって見てみると、ポスターの仏国師像と雰囲気がちよつと似ていますね。この佐倉市の羽鳥という地名は後ほどもう一回出てきますので、ちよつと覚えておいていただければと思います。

さて、ここで佐倉市が出てきたところからおわかりかと思いますが、この道庵會頭は白井氏の出身なんです。白井氏というのは、みなさんご承知のとおり、千葉氏の一族ということになります。かなり早い段階、鎌倉時代の初めに千葉氏の本家から別れて白井氏として一つの家を構え



ていくこととなりますので、非常に古くからある、非常に格式のある家だったということがいえるかと思えます。この白井氏については『千葉白井家譜』という江戸時代にまとめられた書物がありまして、一族のことが非常に詳しく記されています。

この本は、いろいろなところに写本がありまして、国立公文書館、東京大学史料編纂所、そして千葉県立図書館にもあるんですけども、『房総叢書』という史料集で活字になっておりますので、ご覧になった方がらっしゃるかと思えます。それから、この講演の準備をしている段階で気が付いたのですが、地元の白井八景・八ヶ寺めぐり実行委員会がこの『千葉白井家譜』の現代語訳を出されているとのこと。今【画面8】

でお見せしているのは国立公文書館のもので、これを見ていただくと、ここに蔵書印があります。内閣文庫とあります。今は国立公文書館という名前になっていますが、もとは内閣文庫という名前で、明治政府以来の公文書、さらにその前、徳川幕府の持っていたさまざまな書籍、紅葉山文庫という江戸城中にあった書物蔵のものが、内閣文庫を経て国立公文書館に所蔵されています。ニュースで国立公文書館というと行政文書の問題で出てくることが多いです

けれども、実は江戸とか、もっと古い中世、室町・戦国のものもこの国立公文書館にたくさん残っているんですね。

さて、この『千葉白井家譜』の中に、「道庵和尚伝」という一章があるわけなんです【画面9】。白井氏の家譜の中に、その一族の中の一人としてこの道庵曾頭の伝記が入っているということになります。この部分を活字にしたものは【38ページ】に付けてあります。全部読んでみると時間がありませんのでかいつまんで内容をお話しします。まずこの道庵曾頭という人、暦応二年（一三三九）の生まれです。南北朝時代の初めごろですね。そしてお父さんは白井興胤という人です。千葉氏にお詳しい方はよくご存知かと思いますが、この「胤」という字は千葉一族に代々伝わっている字です。先ほどのお坊さんの「頭」という字と一緒にですね。このお父さんの白井興胤は、前々から、もし自分に子どもが生まれたらお坊さんにしてあげたいというんですね。お坊さんにする、しかも無礙妙謙というお坊さんの弟子にしてあげたいらしいんです。無礙妙謙は先ほどの系図にちょっと出てきております。

何でそんなことを考えていたのかといいますと、この白井興胤という人は、幼少のときに白井氏の内紛に巻き込まれて、自分のお父さんを殺されたり大変な目に遭っていたのですが、その際に鎌倉の建長寺で高峰頭日と無礙妙謙、先ほどの系図【画面5】の上のほうにあった人ですね、その二人に匿われてなんとか生き延びることができたということがあったらしいんですね。自分は高峰頭日や無礙妙謙に助けられた、だから自分に子どもが生まれたらその子どもを命の恩人である無礙妙謙の弟子にしようと思っていたというわけなんです。

そうしますと、子どもが生まれたときから、もうこの子はお坊さんに

するんだとお父さんが勝手に決めてしまっているわけですね。そこでこのお父さんは、この後に道庵曾頭になる子どものために、羽鳥村という所に小さなお寺を建てて、そこで魚や肉を食べないで戒律を守って生活をさせる、世俗に染まらないようにさせるということを子どものときからずっとさせていたというんです。羽鳥村、先ほど出てきましたこの道庵曾頭の像【画面6】があるこの浄光寺というお寺があるのが羽鳥という所になります。この道庵曾頭が子どものときに過ごした小さなお寺というのがずっと残って、浄光寺というお寺になっているわけですね。もちろん建物は何度も建て直されていて当時のものではないのですが、おそらく位置は当時と同じで、今でもちょっと小高い丘の上にあります。そういうようなことで、いわば仏教の英才教育を子どものときから施されて厳しく育てられたということになるわけです。

その甲斐あって、鎌倉に行きまして無礙妙謙のもとで非常に優秀なお坊さんに育つわけですね。そして白井に帰ってきて、白井の円応寺の住持になります。円応寺というのは、地元の方はよくおわかりかと思うんですけれども、白井城のすぐお隣というか、ほぼお城の中といってもいい場所にあります。白井一族の菩提寺になっています。その住職になるわけです。「道庵和尚伝」では、「円応寺第二世」と書いてあります。第一世、つまり開山は無礙妙謙、仏真禪師となっていますけれども、先ほどの鎌倉でお父さんの命を救ってくれたあの人ですね、無礙妙謙は普段基本的には鎌倉にいる人ですので、結局のところ実際にこの円応寺というお寺を作るときに動いたのは道庵曾頭ということになって、事実上お寺を作った人ということになるんだろうと考えられます。

「道庵和尚伝」では、この道庵曾頭のもとに白井一族の人たちが集まってきて、この人たちに教えを広げる、禅の教えを説いていくというこ

とになります。そして白井周辺に次々と禅宗寺院を作っていくということがこの伝記に書かれているわけです。そして南北朝時代の終わり、応永二年（一三九五）の七月二三日、五八才で亡くなったということが記されています。

以上がこの『千葉白井家譜』に記された伝記なんですけれども、これは江戸時代の初め、寛文一三年（一六七三）に白井秀胤という人が記したものになります。白井氏の一族が書いたものですから信憑性は高いんですけれども、やはり江戸時代になってから作られたものということになりますので、書かれていることについてはきちんと確認を取っていくということが必要になってきます。ここで確認を兼ねて、道庵曾頭が出てくる他の史料にあたってみようと思います。

一つは、建長寺の側に残っている『建長寺年中諷経并前住記』という史料です。【39ページ】になります。これはカレンダーみたいな形式になっておりまして、建長寺で何月何日にどんな行事をするかということが書かれているわけですね。プリントでは正月一日、お正月だけを載せたあと、ざっと省略しまして一月の部分だけ抜き書きしておきました。お寺の行事といますけれども、主なものはその日に亡くなった人、命日を記して何月何日には誰それさんの供養をするというものになります。ここで一月九日、一月の初九というふうに書いてあるところを見てくださいますと、「道庵和尚忌」と書いてあるわけです。これを見ますと建長寺の側では一月九日を道庵曾頭の命日だとして供養をしているということがわかるんですが、こっちの『千葉白井家譜』【画面11】のほうでは七月二三日に亡くなったということになってるんですね。

若干食い違っています、どうしてなのかというのはきちんとした答えがあるわけではないんですけど、建長寺の側では七月二四日は開



山忌、建長寺開山の蘭溪道隆らんけいどうりゅうの命日なので、七月二四日はいろいろ行事がたくさんあつて忙しいんですよ。七月三日というのはその前日になるので、ちょっとそこは大変ということで一月九日に動かしちゃったのかなと思ってるんです。ではその一月九日が何なのかっていうのが実はまだきちんと調べがついておりませんが、これは全然答えが出ていない問題なんです。この道庵會頭という人物が、鎌倉の建長寺の側でも毎年の命日にその供養をするような、建長寺にとっても重要な人物であつたということはわかるわけですね。

ちなみにこの一月九日と書いてある先ほどの「道庵和尚忌」の下のように龍華院というふうに書いてありますけれども、これは道庵和尚

の塔所、建長寺で住んでいた塔頭ということになります。先ほどの系図【画面5】で見た道庵會頭の弟子たち、漢詩・漢文を書く竺雲頭騰などの「頭」の字を受け継いだ人たちがこの龍華院という所で活躍していたことは、他のさまざま史料に残っています。

② 『千葉白井家譜』と中世の白井

というわけで、命日は二説あるのでなかなかずばつとはいかないんですけども、道庵會頭

という人の生涯をざっとたどりまして、この南北朝時代に白井の辺りにいたお坊さんであつたことがわかりました。そこで、その時代の白井周辺の様子というのがどんな様子だったかというのを考えてみたいと思います。しかし残念なことに南北朝時代の白井周辺っていうのはなかなか史料がないんですね。そこで古文書以外の状況証拠と組み合わせで確認していくことが大事になってくるかと思っています。

例えば、先ほどの道庵會頭のお父さん、白井興胤という人がどんな人だったかというのはいろいろ伝説があるんですけども、実は同時期に白井行胤という人物がいます。この人は足利尊氏の近習であつたりするわけなんですけれども、この人の話といろいろ混同されてしまっている可能性があるので、今日、司会をしていただいております外山信司先生のご論文で詳しく検討されています。白井と白井は混同しやすいというのは、京成電車に乗る方はよくご存知かと思うんですけども、白井行きの電車の行先の掲示が漢字ではなくてひらがなで「うすい」って書いてるんですよ。あれは白井に行きたい人が間違つて白井行きに乗っちゃわないようにわざわざひらがなで「うすい」って書いてるんです。そんなわけで現代でも白井と白井ってごちゃごちゃになっちゃってます。ということなんで、ましてや中世、この白井興胤と白井行胤、白井と白井が似ているうえに両方とも同じ千葉一族で「胤」という字を持っていて、しかも同時期に生きた人なので、後世に混同されるというのはよくある話なんだろうなと思います。全然実証的じゃない感想を述べてしまいましたけれども、そんなことがありますので南北朝時代の白井の様子ってなかなかわかりづらいところがあるわけです。

しかし、先ほどの「道庵和尚伝」の中で白井周辺にたくさん禅宗寺院を開いたという点がありました。これは現代でも比較的簡単に追跡す



ることができるとかと思えます。現在のお寺の分布状況を見てみますと、禅宗、特に臨済宗のお寺が白井周辺にかなりまとまって密集して所在しているんですね。お寺の名前を【36ページ】に挙げておきましたけれども、【画面12】の地図に落としてみました。先ほど見た佐倉市内の羽鳥という所に浄光寺があったり、それから吉見とか、角来とか、飯野とか、あるいは印西市の岩戸の辺りに西福寺というお寺があったりしています。あと志津、ユーカーが丘のちよつと先のほうですけども報恩寺っていうのがあったり、というわけで非常に密集して臨済宗の禅宗寺院が現在でもたくさんあるわけなんです。そして実はここに挙げたそれぞれのお寺の由緒を調べていくと、ほぼすべてのお寺が、このお寺は道庵曾頭が開きましたということをお寺の由緒として伝えていているんですね。

だから、ここに白井の円応寺があるわけですけども、それを取り巻くように道庵曾頭が開いたお寺が所在しているということがわかります。そういう意味では、先ほどの『千葉白井家譜』の「道庵和尚伝」の記述とこの常安寺というお寺につきましては、現在栃木県立博物館の所蔵になっているんですけど

も、地藏菩薩の絵というのが伝わっていました。これは足利尊氏が描いたお地藏さんの絵だといわれているんですけども、この絵の上のほうに、先ほどの詩画軸と一緒に漢文が書いてあるんですね。それを読んでいくと、これは常安寺にあったものだということがわかるものになっています。

一方で、実はお地藏さんの話がこれまた先ほどの『千葉白井家譜』にもありまして、「寺を建てることその数を知らず、多く地藏菩薩をもつてこれを安置す」と書いてあるんですね。道庵曾頭が開いたお寺がたくさん白井の周辺にあつてその数を知らずと言っているんですけども、その多くは地藏菩薩をお寺の本尊にしたんだということが書かれているわけです。仏像なのか、それとも絵画なのかという違いはあるんですけども、この佐倉市の常安寺に地藏菩薩の絵、しかも足利尊氏が描いたとされる地藏菩薩の絵があったということは、道庵曾頭との関わりを強く感じさせるものだと思います。一方で、この白井の辺り以外にはあまり禅宗寺院はなくて、白井の周辺だけに特に集中して臨済系の禅宗寺院があるということになります。そうなりますと、先ほどの『千葉白井家譜』で道庵曾頭が白井一族の信仰を広く集めてたくさんお寺を作ったという話も、ほぼ確実なものと考えていいんじゃないかなというふうに思います。

二 「香取の海」と五山文学

このように白井の辺りに道庵曾頭の関係のお寺が集まっているわけなんですけれども、ではなぜ白井にこうしたお寺が集まったのでしょうか。実はこれは印旛沼の周辺に集まっているわけなんですよね。【画面12】の地図をみていただくと、今の印旛沼はこれだけしかありませんけれども、実は印旛沼というのは中世の段階ではもつと広い大きな湖で、霞ヶ浦と

か、あるいは香取のほうとつながっているような大きな湖の一面になっておりました【画面13】。これがどういうことを意味するかといいますと、水上交通といえますか、船でどんどん行き来ができるという、そういうことになるわけなんです。

そうなりますとこの印旛沼からすぐに霞ヶ浦のほうに行けるということとで、霞ヶ浦の先には何があるかというところ、土浦とか常陸の中心地とかがあるわけです。そしてこっちのほうにさかのぼっていくと、ここ古河になりますけれども、さらに栃木県の足利のほうまですぐに行くことができます。ということで、白井というのが交通の要衝にあたるということになるわけなんです。

鎌倉の禅宗寺院ですとか、あるいは足利学校というのは、非常に盛んに漢詩・漢文の学問をしていた所です。そして常陸のほうには、佐竹氏の菩提寺になっていた正宗寺というお寺があるんですけれども、そこでも非常に盛んに漢詩・漢文の学問が行われていた。そういう所と、印旛沼・霞ヶ浦と直結した大きな湖というのを介して、白井からすぐに行き来することができるということになります。その背後には、鎌倉、あるいは京都から中国大陸との行き来というのがあります。山田先生は漢文の知識がダイレクトに入ってくるということになります。山田先生のお話とも関わりますけれども、中国から入ってくるモノだけではなくて、漢詩・漢文の知識というのが日本に入ってきて、そして鎌倉まで入ってきたものがこの印旛沼の水上交通で直結して入ってくるということになってくるわけですね。

印旛沼の水上交通については、この「千葉市・千葉大学公開市民講座」の去年の講演会で、遠山成一先生、道上文先生が非常に詳しくお話しされていたので、これは動画で配信されているということですので、ぜひ

ご覧になっていただければと思います。

このように、白井という場所は、そういう鎌倉や足利学校という漢詩・漢文と関わる場所と直接交流することができていたということになるかと思えます。ここで、白井興胤という人、道庵曾顕のお父さんが、子どもが生まれたら鎌倉の禅僧の弟子にしようと思っていたということは、もちろん信仰が厚かったということもあると思いますけれども、一方で鎌倉とのつながりをより深いものにしておきたいという、白井一族の利益みたいなのも考えていたのではないかなと思います。

ちなみにそういうことを考えていたのは白井氏だけではなく、印旛沼からつながった霞ヶ浦の向こうの佐竹氏のほうも同じことを考えています。実はその佐竹氏の一門から、先ほどの道庵曾顕に連なる一門に籙叔顕良という僧を出しています。この人は、正確に言うと佐竹氏一族ではなくて佐竹の家臣の家の出身なんですけれども、佐竹氏も同じようなことを考えていたことがうかがえます。そういう意味では、中世の禅僧の学問が一族の繁栄みたいなのとつながっていたということになるかと思えます。ですから鎌倉の詩画軸の流行というのは、印旛沼が世界に直結していたということのおかげだったというふうに言っても過言ではないかなと思っております。

時間を大幅に超越してしまっていますので申し訳ありませんでした。最後の方は駆け足になってしまっています。雑駁な話となってしまうかもしれませんが、ここまでとさせていただきます。どうもありがとうございます。ございました。

千葉市・千葉大学公開市民講座(2021.12.11)
「千葉氏・禅宗・東アジア—中世房総をめぐる新たな視座」

レジュメ1ページ

千葉一族・臼井氏と五山文学

川本慎自（東京大学史料編纂所）

■はじめに

詩画軸：水墨画と漢詩の総合芸術

禅宗寺院を舞台につくられる ex.如拙「瓢鮎図」(退蔵院所蔵)

関東での流行は戦国期、京都での流行(室町期)より少し遅れる (相澤・橋本2007)

水墨画：建長寺僧・祥啓が京都遊学して伝える ex.芸阿弥「観瀑図」(根津美術館所蔵) 史料1

漢詩：玉隠英瑛・竺雲顕騰・用林顕材・籌叔顕良ら、鎌倉五山の文学僧 →どこで学んだ？
文学僧・学問僧たちの多くは「顕」の法系：南北朝時代の道庵曾顕という禅僧が起点

○道庵曾顕の弟子たちからなぜ学問僧を輩出したのか？

■ 1. 道庵曾顕と臼井氏

①『千葉臼井家譜』の「道庵和尚伝」

『千葉臼井家譜』：寛文13年(1673)に臼井秀胤が臼井氏の歴史を記したもの

「道庵和尚伝」という一章あり 史料2

- ・道庵曾顕は臼井興胤の子、暦応2年(1339)生まれ
- ・父・興胤は子が生まれたら無礙妙謙の弟子にしたいと考えていた
(←臼井氏の内紛時に建長寺に匿われ、高峰顕日・無礙妙謙に助けられたとの伝説)
- ・鎌倉の無礙妙謙のもとで修行、臼井に戻り円応寺の二世住持となる
- ・臼井周辺に多くの禅宗寺院を開創、臼井氏一族の帰依
- ・応永2年(1395)年7月23日に示寂、58歳

※「道庵和尚伝」以外の情報源から補足：

道庵の命日は『建長寺年中諷経并前住記』では11月9日とする 史料3

建長寺における塔所は龍華院、ここに「顕」字を嗣ぐ弟子たちが拠る

②『千葉臼井家譜』と中世の臼井

- ・南北朝期の臼井氏の動向
他の史料があまり見えない
臼井興胤の伝説は、足利尊氏近習の臼井行胤の行状と混同？(外山2008)
- ・臼井周辺の禅宗寺院
羽鳥浄光寺・吉見小林寺・角来円通寺・飯野常安寺・岩戸西福寺・志津報恩寺
いずれも道庵曾顕が開山と伝える
cf.「足利尊氏筆 地藏菩薩像」(栃木県立博物館所蔵、常安寺旧蔵)
臼井周辺だけに密集して禅宗寺院が存在

■ 2. 「香取の海」と五山文学

① 印旛沼と鎌倉円覚寺・建長寺

臼井周辺の禅宗寺院：道庵曾頭の開山、臨済宗仏国派（高峰頭日の法系）

印西庄：応永2年(1395)に円覚寺領となる

臼井星名郷神村：永和4年(1378)に建長寺宝珠庵領となる 史料4

→印旛沼を取り巻くように鎌倉円覚寺・建長寺の末寺や寺領

中世の印旛沼：霞ヶ浦までつながった大きな湖（「香取の海」）（市村他2007・外山2019）

→臼井は水上交通の要衝

② 「香取の海」がつなぐ学問の道

建長寺宝珠庵：南北朝期から学問のさかんな塔頭

ex. 歴代塔主に画僧・祥啓、その師・仲安真康も宝珠庵から伊豆吉祥寺へ
伊豆吉祥寺～鎌倉宝珠庵～常陸正宗寺～足利学校のつながり

ex. 足利学校所蔵『周易』の表紙裏貼りに「三島暦」の反故紙が使われる
鎌倉と常陸の中継地点に臼井

■ おわりに

あらためて課題の確認：道庵曾頭の弟子たちからなぜ学問僧を輩出したのか？

→鎌倉と足利学校を結ぶ結節点に印旛沼、学問に触れやすい環境

臼井氏と詩画軸（五山文学）とのつながり

→常総の水上交通を背景、臼井氏の豊かさを示す

「香取の海」がつかないもの：物流だけでなく漢詩や和歌などの学芸もつなぐ

■ 参考文献

相澤正彦・橋本慎司『関東水墨画 型とイメージの系譜』（国書刊行会、2007年）

石渡洋平「戦国期下総臼井氏をめぐる諸問題」（『佐倉市史研究』26、2013年）

市村高男・茨城県立歴史館編『中世東国の内海世界』（高志書院、2007年）

小出博『利根川と淀川』（中公新書、1975年）

佐藤博信「古河公方周辺の文化的諸相」（『続中世東国の支配構造』思文閣出版、1996年）

千葉市立郷土博物館編『千葉氏の領域における交通と流通』（千葉市・千葉大学、2021年）

外山信司「足利尊氏と臼井興胤の伝説」（『八千代市の歴史』通史編上、2008年）

外山信司「「香取の海」を基盤とした中世の権力と文化」・『雲玉和歌集』と印旛の浦

（石渡洋平編『旧国中世重要論文集成 下総国』戎光祥出版、2019年）

野口実「鎌倉幕府の成立と下総臼井氏一族」（『中世東国武士団の研究』戎光祥出版、2021年）

湯浅治久「北総荘園の変容と印西内外十六郷の成立」（『地方史研究』346、2010年）

川本慎自『中世禅宗の儒学学習と科学知識』（思文閣出版、2021年）

レゾメツトページ

史料一 『観瀑図』（根津美術館所蔵）より横川景三賛詩

銀河成瀑掛雲端孰与香炉峰下看

橋上誰歎僧太白三千尺雪七条寒

相陽啓上人、遊於絵事者也。戊戌歳、觀光上国、

就国手芸阿学画、三年而業成矣。一日告別、

回里。芸自画於軸、以餞其行。意在証得於芸者耳。

可嘉矣。月翁・蘭坡題詩其上、書此列於後云。横川叟（印）

（大意）

相場（鎌倉）の祥啓上人は絵を得意とする者である。戊戌（文明十年一四七八）に上京して国いちばんの名手である芸阿弥について画を学ぶこと三年、ついに画業を成し遂げることとなった。この日別れを告げて里に帰るといふことになり、芸阿弥は自ら軸に絵を描いて餞別とした。その意図は、芸阿弥のもとで（画業を）得たことを証明しようといふところにあつた。喜ぶべきことである。月翁周鏡と蘭坡景菫がその画の上に詩を書いたので、その後続けて書いた次第である。

史料二 『千葉白井家譜』（国立公文書館所蔵、『房総叢書』九所収）

道庵和尚伝

瑞湖山円心禅寺二世道庵（號）建和尚者、興胤（白社）之長子也。曆応二年（己卯）十月二十四日誕生。時興胤言、我嘗心期、若生男子、可レ為二仏一真（無礙妙蓮）禅師之弟子、心期雖人之所レ不知、我何自欺乎。乃於領地羽鳥村二新造一小宇二令レ乳一養之。其心、禁魚肉之臭味、避俗塵之汚染。且使下乳母戒肉味断中色事上。至其侍衛者、咸皆齋戒。然後漸長比、及レ知二西東一、性智自超衆、骨相更非凡。七歳入二円心寺一、雜染受戒。始教レ之以二仏経一、次以二祖録一。一聞レ之不忘、一過而記憶。後心二印臨一濟之禅、而嗣二法仏真禅師一。為二円心寺二世山主一、大振宗風、遍接二緇素一。加之、建寺不知其数。多以地蔵菩薩安二置之一。故時人言曰、師是地蔵化身也。彼羽鳥村小宇、後為寺号二持斎庵一。師自幼時二至三七歳一所二持斎一之处也。興胤貞治三年（甲辰）四月十八日卒。葬于瑞湖山。法諱号二江鑑行胤一。行胤者嘗（高峰頭目）仏国二禅師之所レ定諱也。因二將軍家嚴命之辱難レ辞、一雖改二換之一、今又復レ旧為二法諱一。興胤在日所レ語道庵和尚之遺意也。六郎尚胤（道庵和尚之弟也）承二統家督一、不改二父之道一。其於道庵和尚、猶興胤之於二仏真禅師一。道庵勸二尚胤參禅一。一日忽有二省処一。師自賜レ号二道頭居士一。応永二年（乙酉）七月二十三日、師春秋五十八歳、遷二化于他邦一。弟子曇林茂和尚、得二師之髓一、而為二円心寺三世之法嗣一。

史料三 『建長寺年中諷經并前住記』(建長寺所蔵、『鎌倉志料』一所収)

巨福山 建長興國禪寺年中行事于后

正月初一 粥罷祝聖諷經 就于西來庵諷經

修正三時上殿(早晨就于方丈觀音懺法)
齋罷就于大仏殿法花懺法

(中略)

十一月初一

初二

初三

初四 永安寺殿壁山全公忌

初五

初六 古天和尚忌

初七 海□入道殿 雲峰理慶禪門忌

初八

初九 道菴和尚忌 祖堂入牌歳文安丙寅

初十

十一

十二

十三 覚雄禪師忌

十四

十五

十六

十七 草堂和尚忌

十八 妙覚禪師忌

十九

二十

廿一 晚間最明寺殿宿忌

廿二 最明寺殿忌 可有頓写

廿三 廿二日大樹和尚忌

廿四 宗覚禪師忌

廿五

廿六 中叟和尚忌

廿七

廿八 大通禪師(徳治元年丙午)

廿九

晦日 仏源禪師忌

(下略)

龍淵菴

同契菴

伝灯庵

伝芳菴

龍華院

史料四 『相州文書所収宝珠庵文書（南北朝遺文） 関東編五、三九〇九号』

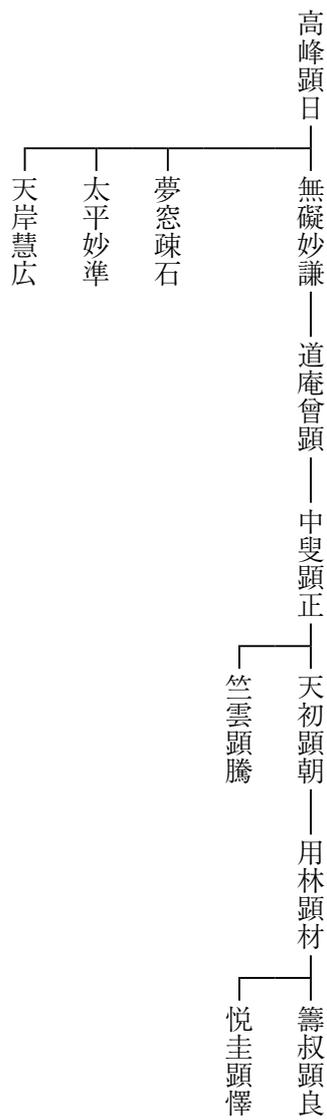
下総国 □井〔地名〕 □郷内神〔村名〕 □半分事

右、為三天長地久・国家安穩、殊瑞泉寺〔定利基氏〕 □御菩提并本覚禪師灯油料、
将 □亡父崇中禅門追善、相副彼料相伝証〔文〕 □、永代所寄附于当庵、
也、若為道維之遺跡、有違乱輩者、可為不孝之者也、仍寄附之状
如件、

永和四年十二月五日

道維（花押）

關係法系図



画面1

千葉市・千葉大学公開市民講座
「千葉氏・禅宗・東アジア—中世房総をめぐる新たな視座」

千葉一族・臼井氏と五山文学

東京大学史料編纂所 川本慎自

画面2

竹斎読書図
(東京国立博物館所蔵)



画面3



画面4

『観瀑図』(根津美術館)
 横川景三賛

相陽啓上人、遊於絵事者也。
 相陽の啓上人、絵事に遊ぶ者なり

戊戌歳、觀光上国、就国手芸阿学画、
 三年而業成矣。
 戊戌歳、觀光して国に上り、国手
 芸阿に就きて画を学ぶ

一日告別回里。芸自画於軸、以餞其行。
 一日別れを告げて里に回る。芸自ら
 軸に画し、以て其の行を餞す。

意在証得於芸者耳。可嘉矣。
 意は芸に得たるを証するに在るのみ。
 嘉すべし。

月翁・蘭坡題詩其上、書此列於後云。
 月翁・蘭坡、詩を其の上に題す、此を
 書し後に列すと云ふ。

画面5

関係法系図（仏国派） 道庵下 = 顕の法系

高峰顕日——無礙妙謙——道庵曾顕——

——中叟顕正——┬天初顕朝——用林顕材——
└竺雲顕騰

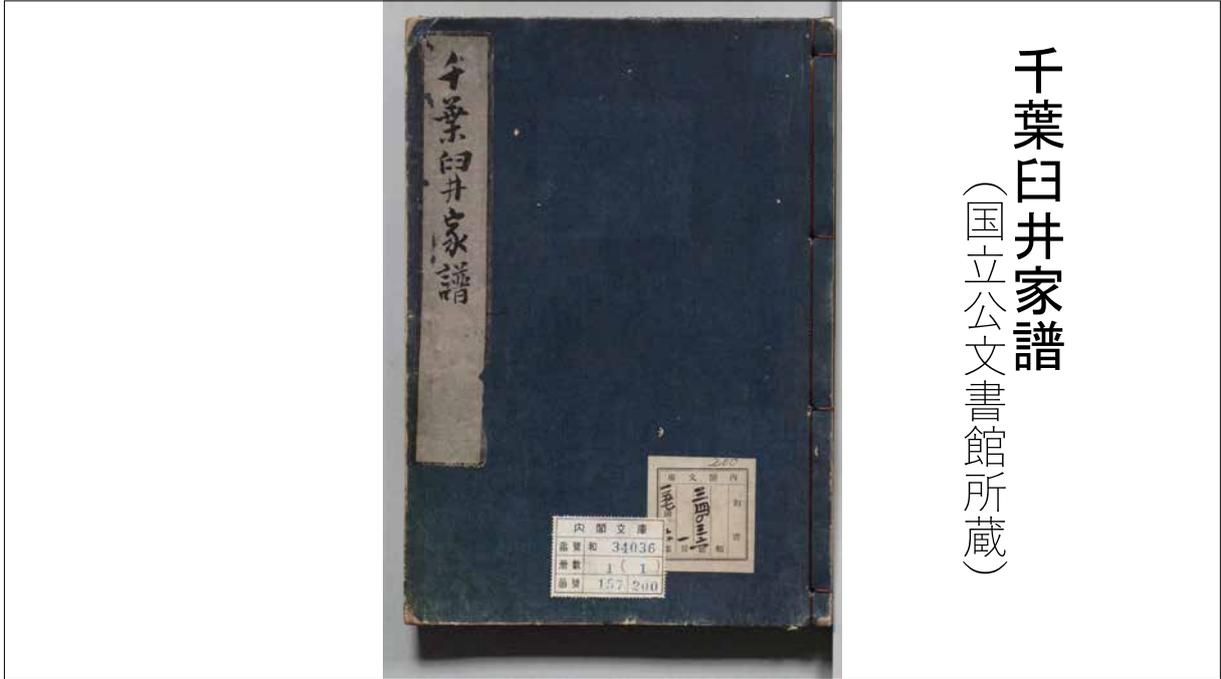
——籌叔顕良

画面6



道庵曾顕像
(佐倉市羽鳥・浄光寺)

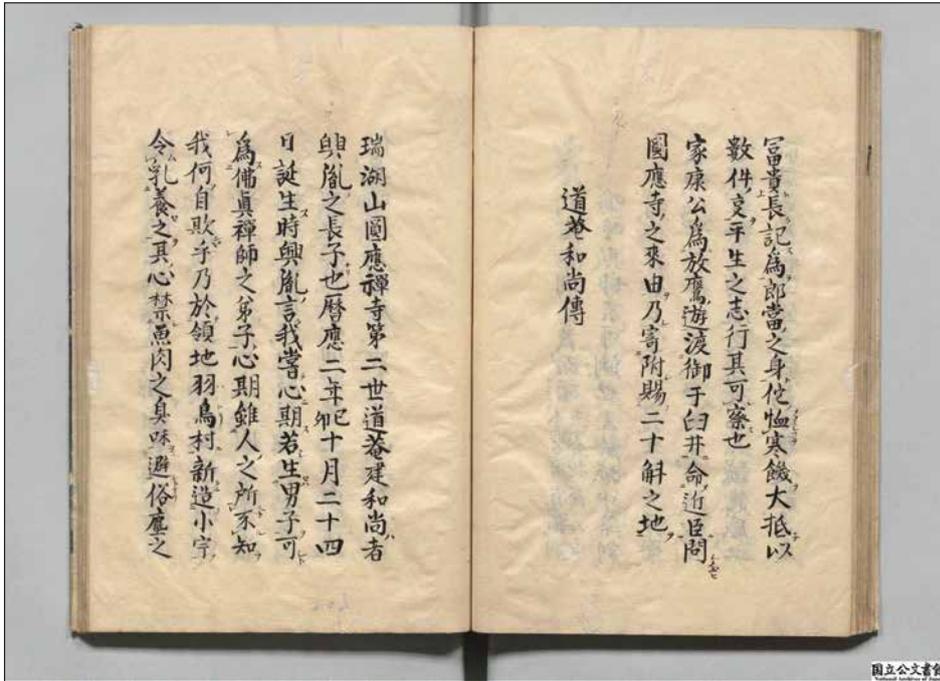
画面 7



画面 8

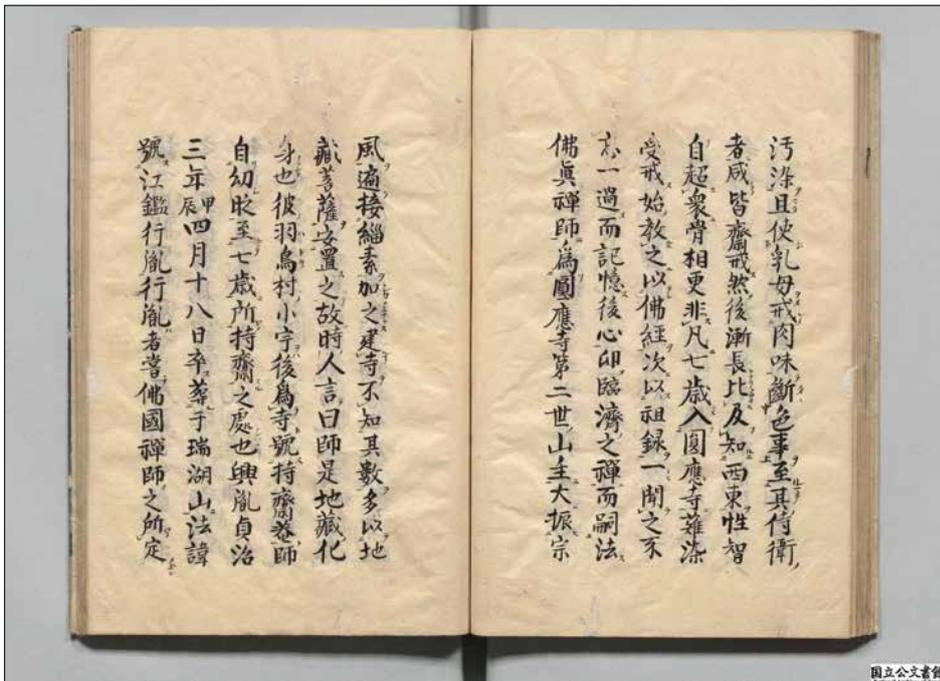


画面9



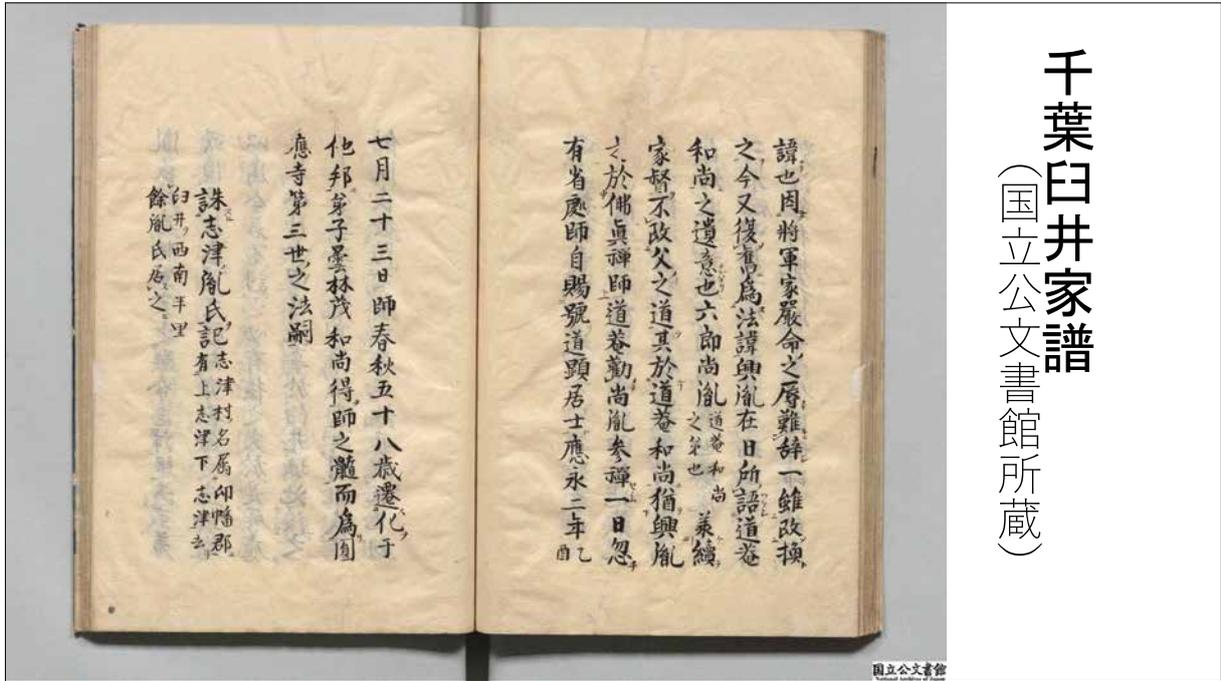
千葉白井家譜
 (国立公文書館所蔵)

画面10



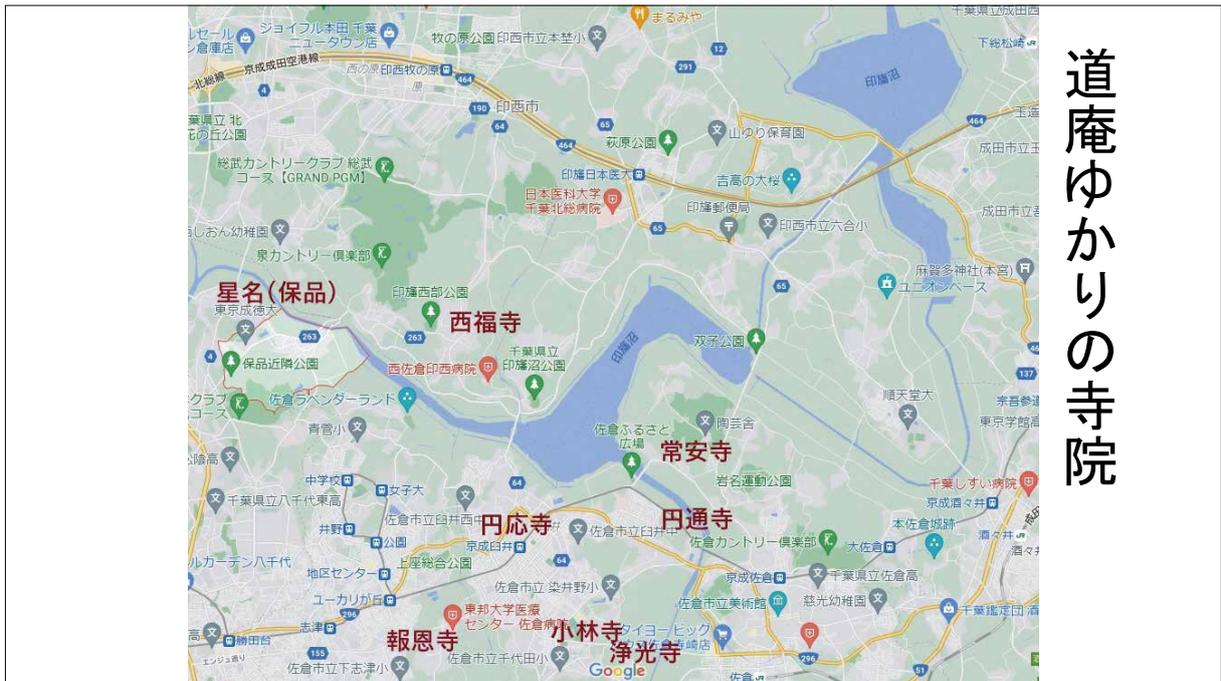
千葉白井家譜
 (国立公文書館所蔵)

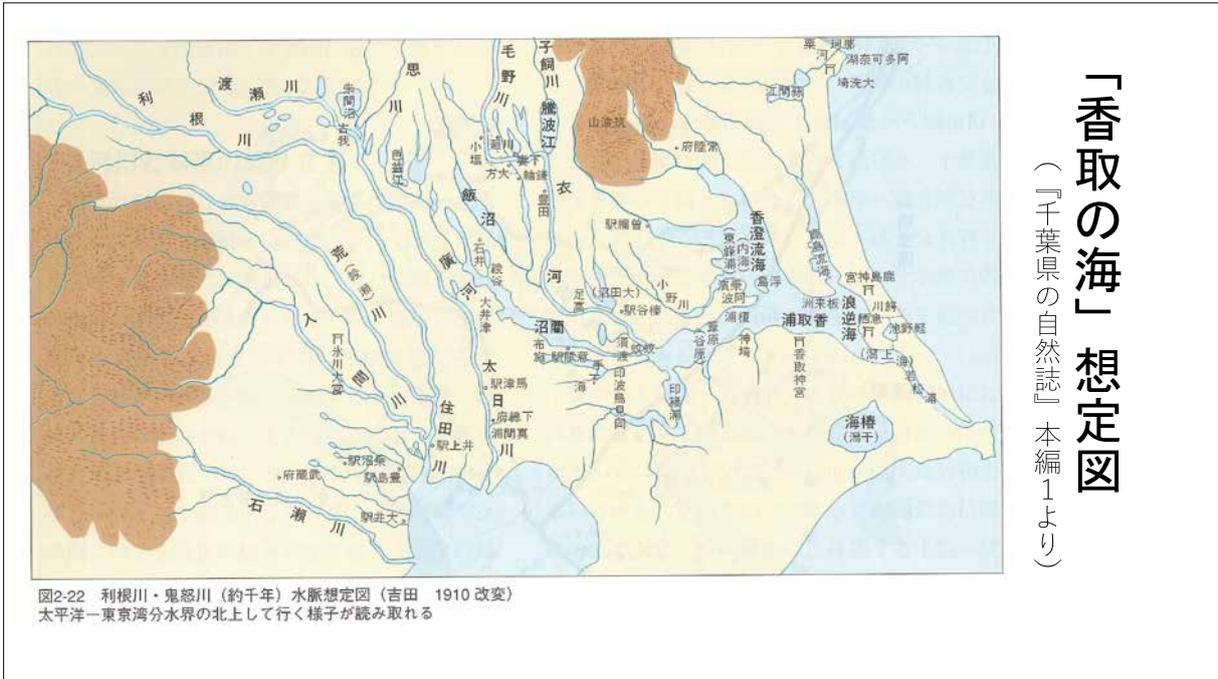
画面11



千葉白井家譜
 (国立公文書館所蔵)

画面12





「クロストーク」

池田 忍（以下池田）

みなさま、たくさん質問もお寄せくださいましてありがとうございます。これからさっそくクロストークのほうを始めさせていただきますと思います。ご紹介にあずかりました千葉大学大学院人文科学研究院の池田でございます。よろしくお願ひします。

※拍手

池田 ありがとうございます。では、さっそく始めていきましよう。会場でお聞きくださった多くの皆さまが、山田先生によるヨーロッパまでを視野に入れたご講演、一三世紀を中心とする人とモノ、そして

モノと人が移動する文化、そして経済の移動、伝わるモノという問題に絡んだご質問を寄せられました。続く川本先生は、まずピンポイント、「一〇キロぐらいの圏内で」見ていくとおっしゃったのですけれども、そこから鎌倉へ、さらに京都へ、そして京都から鎌倉、また房総の白井へと循環し、最終的には外側にある東アジア世界につながっていくという流れが浮かび上がってきました。聴衆の皆さまは、お二人の先生のご講演のつながりを、意識してくださったようです。

そこで、最初にまず山田先生と川本先生の間で相互応答を始めていただくところからがいいかなと思うんですけども、いかがでしょうか。じゃあ山田先生からお願いいたします。

山田 賢（以下山田）

はい、今日はありがとうございました。私、川本先生のお話を聞きながら、事前に具体的にあまりお話の内容を打ち合わせて詰める機会はなかったので、お互いに大体こういう話をしますという交換をしてできるだけそれに合うようにということの前座を考えたいわけですが、お話を伺ってうまく前座が務められたのではないかと、ふうに自画自賛しております。と申しますのは、私の話は一三世紀を中心にして非常に大きな背景から日本列島の流通、貨幣の問題を考えようという意図で出発いたしました。そして川本先生はその中で具体的にマクロな状況とつながった房総のミクロな状況というものを説明いただいたわけで、香取の海というものを媒介して東日本の知の流通の結節点になっていた房総と千葉、千葉一族、白井氏というものを話したいいただいたわけで、そうするとこれでマクロな状況とそれを具体的に地域の中でどう流通させたのか。現に房総からもたくさん大陸からの輸入品が出土しているわけです。そして大陸からのさまざまな知というものを受容されているわけです。東国でも漢詩、漢文学、そういった学問というものが非常に熱心に、しかも高いレベルで維持されていたということがわかるわけですので、じゃあそれは入ってきてどういうふうにかこの地域で広がったのか。その問題を大変興味深く伺うことができたと思っております。

最初にしゃべり始めたという特権を利用して、まず私のほうから川本先生に一つ質問をしたいと思っております。私は中国の近世を勉強しています。で、東アジアの近世という儒教が圧倒的な力を持っている、そういう時代です。ところが近世から中世を振り返ってみると仏教



が社会の中に占めていた役割というのが非常に大きいということがよくわかります。例えば千葉一族、白井氏においても川本先生のご発表にあったようにおそらく一族が道庵會頭の鎌倉行きというものを後押ししたのではないかと。そして道庵會頭がたくさんのお寺を印旛沼の周辺に建てるわけですが、どこかにそのパトロンもいたはずですよ。そうすると道庵會頭の活動とそれをバックアップした千葉一族、白井氏のメリットですが、白井氏はそのことによって大陸までつながるような知的ネットワークの中に位置付けられる。近くは鎌倉まで、足利学校までつながるといふ状況を手に入れることができたというわけです。ですので、中世における僧の、仏教僧の、禅僧の社会的な位置というものについて改めて教えていただければというのが近世から見た場合の質問ということになります。たぶん中国に渡航した僧侶たちにしても必ずさまざまな準備が必要だったはずで、いったいそのバックアップはどこから受けていたのかという問題が出てまいります。そのことも含めて教えていただければというのが、まず私からのコメントというか、質問でございます。

池田

では川本先生、お願いします。

川本慎自（以下川本）

ありがとうございます。山田先生のお話、非常に大きなお話で大変勉強させていただきました。忘れないうちに今のご質問のほうに先にお答えをさせていただきますと思います。儒教と仏教という話でいいますと、中国近世における儒教の位置や、もつとさかのぼって宋代における儒教、あるいは仏教の位置付けに比べると、日本中世での儒教と仏教とのウエイトの大きさというのはいぶ違うと思うんですけども、逆にいうと日本の禅宗というのはそのウエイトの大ききの違いっていうのを利用してるところがあるんじゃないかなというふうに思っています。

というのは、鎌倉の末から室町にかけての日本の状況っていうのは、中国において儒学という新しい学問が非常にやっているといるんだよっていうのを情報としては持っているんですけども、それがどんなものなのか、きちんと具体的に知りたいんですけども、それを直接的には知る手段はない。で、それを知る手段を持っているのが、中国に渡ったことのある禅僧たちということになります。そうすると禅僧たちは中国の最新の知識というのを武器にして禅宗を広めるといいますか、そういう中国の最新の文化みたいなものをセットにして日本で禅宗を広めていくということをやった、ある意味戦略的にやっていたんじゃないかなと思っております。

そういうことをすることによって、道庵會頭みたいなお坊さんたちの背後にいる、出身の白井氏であるとか、あるいは千葉一族であるとか、そういう人たちも中国の最新の情報を得ることができるといふのが第一の利点になる。だから禅宗に支援をする。そういうふうにお互いに利益のある関係っていうのができてくるんじゃないかなというふうに考えています。そういう意味では、禅僧の社会的地位というのは、直接的に政治に関わる、権力を掌握する人たちというよりは、そういう人たちに對して最新の知識を提供する、顧問みたいな感じですかね、そういう位置付けになってくるんだらうなということは一つ考えています。

それとは別に、今日の私の話の詩画軸とちよつと絡めさせていただければなんですけれども、今日スライドでお見せしたのは風景画に漢詩をのせたものが主だったんですけども、それとは別に人物画、肖像画の上に漢詩をのつけているような作品がたくさんあります。これは要するに何に使うのかっていうと、お葬式とか法事とかに使うものなわけですよ。現代でいえばお葬式の遺影みたいな感じのものを肖像画を描いて使うわけですけども、その上の漢詩で、肖像画に描かれた亡くなった方の生涯、一生をダイジェストで書いてくれるものになります。お葬式



のときにその人の一生を一枚の絵と漢文でダイジェストするというのは遺族にとって非常に魅力的なものだったと思うのですが、それをできるのはある意味禅僧しかできなかつたということがあります。

そういうやり方がどこから出てきているかというところ、中国の儒教の祖先祭祀のあり方から学んだ部分が結構あるというようになりなすので、そういう現代に続くお葬式のやり方につながるような意味でも、中国の知識が渡ってきたというのは非常に大きかったのかなというふうに考えております。きちんとお答えになつていくかどうかかわからないんですけども。

池田

ありがとうございました。やはり具体的なモノとしての絵

画、文化的媒体の持つ意味、高度な知識と視覚に訴える力を利用して、帰依する人々たちをつかんでいくつていくことなのかなあと感じました。私は、美術、イメージの歴史を勉強して者として、川本先生の応答を非常に興味深く伺ったわけです。

それでは、川本先生のほうから山田先生に何かご質問なり確認したいこととかございましたらお願いできますか。

川本

はい。今日のお話で非常に興味深かったのが、銅銭を日本に持つてくるときに、

中国側の事情として、紙幣が流通していたので銅銭がいらぬものになつてきているということでした。

そうなりますと銅銭みたいなものつていうのは、中国側ではお金ではなくつて物品扱いみたいなかたちで日本にやってくるつてきたのか、そしてそれを貿易している日本側の商人もお金として認識しているのか、それとも物品として認識しているのかというのはどういうふうにか考えたらいいんでしょうか。というのは、日本にくるときは持つてくるモノに対する意識つていうのがどういうふうになつてきたのかなつていうのが非常に興味深く感じたということなんですけれども。

池田

会場からも共通した質問がやはり出ています。大量の銅銭が日本に流入したこと、それを受け止める日本側の意識、日本の歴史に与えた最も大きなインパクトは何でしょうか、といった質問もきています。それでは山田先生、いかがでしょうか。

山田

はい。正直なところ、このあたり当時の人々の意識のありようはどうだつたつていうのが大変難しいところでございます。というのは、たぶん想像でしかないんですけども一三世紀になるまでなかなか地方では埋蔵銭が発見されないということはどういうことだつたかというところ、一二世紀の日本貿易でも当然銅銭は入つてきたはずですが、ただしそれが流通していたのはひよつとすると都の周辺だけだつたかもしれない。地方までは銅銭というものが行き渡るほど潤沢にまだ供給されていなかったかもしれないと考えられます。おそらくそういう世界においてはお米であるとか絹であるとか、中国大陸でもそうです、貨幣がないときには必ずそういうものがある種の交換の基準というふうにご利用されることになりなす。そこにある意味では見たことのない銅銭、どうやら都ではこれを使つていくつていくつてこれでも買えるらしいと



いろいろなものがまさに突然衝撃のように入ってくるという状況の中で、人々がそれを、つまり貨幣として受け止めたのかどうかという問いかけ自体がはたして成立するのかどうかというのがあるのがなかなか難しい。

つまり貨幣を知らない世界において、これは貨幣なのだという受け止め方がいったいいつ成立するのだろうかというのが実は私自身が報告していてもわからないという側面がございます。

これは輸入する商人にとってもやっぱりそうだったろうと思います。日本からの金や銀や、あるいはそろそろ成立しつつあったんですかね、蒔絵とか、そういうものを持って行ってできるだけ大量の銅銭を確保して帰ってくるわけですけども、貿易商人にとってはそれは対価として受け取ったモノとして輸入するわけですが、日本列島に入ってくるとそれはたちまち貨幣になるわけですね。そういう状況がもう一三世紀の後半には日本列島に成立しつつあったと思いますが、なかなかその意識のありようであるとか、どのようにそれは認識されていたのかという問いに対してうまいお答えができません。すみません、今の時点ではそういう感想めいたコメントしかできないのですがお許しいただきたいと思えます。

池田

ありがとうございます。モノと人をつなぐネットワークに

関わって、さらにフロアから質問が出ていたので、続けてよろしいでしょうか。まず、川本先生へのご質問です。一つは、今日ご紹介くださった白井氏の道庵の場合、修行というのやはり鎌倉で行ったのだろうか、つながるといえるのか、そして続けて、京都との関係は鎌倉を通して二つ目、詩画軸に関連してのご質問です。お話し冒頭で、建長寺で

学んだ僧・祥啓が、京都からの帰りに、師である芸阿弥から詩画軸を学習、「免許皆伝」の証として関東に持って帰るといふことをおっしゃいました。詩画軸は、まさに京都とのつながりの証となるという意味だと思います。詩画軸は、他に関東と都のネットワークに関わるようなものとして、何か史料は残っているのだろうか、というご質問がありました。いかがでしょうか。

川本

ありがとうございます。道庵曾頭がどこで修業したかということになりましたけれども、これは基本的には鎌倉の建長寺ということになるかと思えます。道庵曾頭自身はそこから先、京都に行った形跡はないのですが、一方でこの南北朝時代、あるいは室町時代、鎌倉と京都の禅宗寺院の間での行き来というのは非常に頻繁に行われておりまして、それは戦国時代の祥啓が京都に絵の修行に行くということからわかります。定期的に京都から鎌倉に禅僧が派遣されてきて鎌倉でいろいろお寺の役職に就いて帰っていくというようなことのもよくみえていたようであります。

それから房総でという話になりますけれども、これは最近ちょっと調べたことなんですけれども、室町時代に成立した『三国伝記』という仏教説話集があるんです。この中に上総国の願成寺という所のお話というのが出てきます。これは実は今日の司会の外山先生が非常に詳しくご研究されていたことなんですけれども、この中に、願成寺でお経を使って

供養をしなきゃいけないんだけど、そのお経の名前がわからないみたいな話になって、方々を訪ねていろいろ聞いて歩くんですけど、最終的に京都の夢窓疎石のお弟子さんがいろいろ教えてくれたっていうような話があるんですね。上総でわかんないわかんないって言うたのが最終的に京都の夢窓疎石のお弟子さんが教えてくれるっていうことで、上総と京都の間で行き来があることを示す、これはもちろん仏教説話ですので歴史的事実とはまた違って、いろいろ解釈が必要になってくるわけですけども、そういうことを示す一つの例かなというふうに思っております。

池田



人々の間の層の厚い行き来の一つとして禅宗、禅僧を中心とするネットワークがあり、高

次の中国の文化とつながっていたという理解でよろしいでしょうか。禅宗、禅僧が、房総から鎌倉、京都へと移動し、そして中国につながっていく状況がはつきりと示されたと思います。

そこで、山田先生にお伺いしたのですが、一三世紀から一四世紀にかけて、渡元僧の日本側のスポンサーはどんな人だったのでしょうか。禅僧たちを中国へと送り出す、日本側の事情、背景について、もう少し説明してほしいという質問がありました。いかがでしょうか。

山田

はい、ありがとうございます。二点ともなかなか実証レベルできちんとこうであるということ資料から論証することは難しいのですが、南宋、それから元の時代に日本から中国大陸に渡った僧侶たちにつきましては、今手元に持ってきた榎本先生の著書があります。

榎本渉先生は『南宋・元代日中渡航僧伝記集成』、現在残っている記録のすべてを網羅的に集めて南宋や元の時代に日本列島から中国に行つた僧侶の伝記すべてを集めたという大著を出しておられます。これを見ていくと今残っている資料については大体わかるのですが具体的にどんなスポンサーによって彼らの渡航が後押しされたのかっていうのは具体的には出てこない。ただ、予想されるのは先ほどの川本先生のお話で、一族から鎌倉に派遣して勉強させるといことが一族にとってもメリットのあることであつたということがあるんですけども、当然のことながら中国に渡航させて最新の学知というものを向こうで学んできて、かつ、また日元貿易を行っている商人たちともネットワークができるということは大いに一族の発展、経済活動にとつても裨益することだつたと思われまので、まず第一には出身の一族の支援というものを想定することができると思います。

もう一つ、やはり日本と元の交易、それから人的交流というのも一種の相互関係ですのでこちらにとつてのメリットというのはあるんですけども、元のサイドにどんなメリットがあつたのかということがもう一つの問題になります。学知のサイドで考えると日本の渡元僧、元寇で戦闘状態にあつたにもかかわらず一旦元に入つてしまつても結構自由に中国大陸の内部を動き回っております。相当奥地まで入っています。あちこちを回つてはそこでネットワークを作り、有名な中国側の禅僧に、先ほどの川本先生のお話みたいに詩を書いてもらつたり偈を書いてもらつたり。で、それを書いてもらつて日本に持ち帰るといようなことをしていたわけです。

おそらく中国側にとってはやはり学徳を慕って異国からたくさん留学僧がやってくるということ自体が、それを受け入れるお寺や僧侶のまさに社会的な威信、権威というものにつながっていたのかもしれないと思うわけです。というのも、結構日本の留学僧が中国に行って詩や偈を書いてもらうわけですけども、わりあい相手の中国側の僧侶が何人かに集中している傾向も見られます。受け入れる側もそれを受け入れるメリット、やはりそれを考えたうえで日本の留学僧の相手をしていただろうなというふうには推測しています。

池田 ありがとうございます。それはまた、逆に京都で、あるいは鎌倉で、佐竹氏も含めてですけども関東一円の有力な一族の子どもを受け入れることにも、メリットがあり、大事にされたということになるでしょうか。続いての質問になりますが、川本先生、如何でしょうか。

川本 そのとおりだと思います。もっと具体的にいえば、鎌倉の建長寺や円覚寺の塔頭、お寺の中の建物ですよね、その建築費用を例えば千葉氏に出してもらうとか佐竹氏に出してもらうとかっていう、そこに来ている禅僧の出身母体に寄付をもらうっていうような、本場に具体的なレベルでのメリットというのもあるかなと思います。

池田 ありがとうございます。あ、時間ですね。本当に豊かな、広がりのあるテーマだったので名残は尽きない気持ちです。けれどもクロストークでは、フロアのみなさまのご質問にも、お二人の先生からお答えをいただくことができました。充実した時間をありがとうございました。

この辺りで終了とさせていただきます、外山先生にマイクをお返しします。

(司会) 外山

先生方、ありがとうございました。みなさまにはたくさんのご質問を頂きましたが、お時間の関係で触れることができないものもあつたかと思えます。どうぞご了承ください。

例えば了行法師のご質問なども受けたのですが、この問題は大変大きい問題でありまして、お答えするとなるととても時間が足りません。まずは野口実先生のご論文などを読んでいただければと思います。

それでは今一度ご登壇いただきました先生方に拍手をお願いできればと思います。ありがとうございました。

閉会挨拶

天野 良介（千葉市立郷土博物館館長）

千葉市立郷土博物館の天野でございます。本日のお二方のご講演、及びクrostークをお楽しみいただきましたでしょうか。

千葉市と千葉大学との共催の形で開催をさせていただいております。公開市民講座も本年度で五回目となりました。昨年度はコロナウィルス感染症蔓延の状況に鑑み、映像配信・講演録刊行といった変則的な形での開催とせざるをえませんでした。しかし、本年度は参加人数を絞る形での開催となりましたが、三回目までと同様、この素晴らしい「けやき会館」を会場に開催

させていただくことができました。これもひとえに千葉大学の御理解とご配慮の賜物と、心よりの感謝申し上げる次第でございます。

また、今回貴重なご講演を賜りました、千葉大学大学院人文科学研究院教授の山田賢先生、東京大学史料編纂所准教授の川本慎自先生、また、意義深いクrostークを進行してくださいました同研究院教授の池田忍先生、開催にいたるまでの御

準備をお進めくださった同研究院准教授の久保勇先生、及び大学事務局をはじめとする関係各位に、千葉市を代表いたしました。改めて衷心よりの感謝を申し上げます。ありがとうございました。

さて、今回の公開市民講座でございますが、これまで「一懸命」を旨とし、東国に土着する質実剛健な「在地領主」として理解されがちであった、中世武士団の「在り方」や「文化的環境」について、国内は元より海を越えた東アジアの動向とも関連づけ俯瞰してとらえようとする試みでありました。就中、千葉一族もまた、そうした動向とは無縁ではありません。昨今の研究からは、国内各地にその所領を展開し支配を貫徹することは勿論のこと、その文化圏は東アジア文化圏とも直結する「広域」領主の実像が透けて見えてきております。本講座を通じて、千葉氏と房総の中世を新たな視野の下で御理解いただけましたら、開催の意義は達成されたものと存じ上げます。

千葉市は、本年度を「市制施行一〇〇周年」を記念する年度と位置付け、本館でも様々な事業を展開して参りましたが、五年後の令和八（二〇二六）年度には、千葉常胤の父常重が千葉市中心地に進出して街の礎を築いてから九〇〇年、つまり「千葉開府九〇〇年」という記念の年を迎えようとしております。アニヴァーサリーに向けて、本市として全力で諸事業に取り組んでまいります。また、本館も関連特別展・企画展の開催をはじめとする様々な事業を展開いたします。今後とも、本館の活動に何卒ご期待いただけますようお願い申し上げます。次第でございます。

結びに、地域史研究の今後の益々の発展、ご出席くださいました皆様のご健勝、そして、何よりもコロナウィルス感染症の一刻も早い終息を祈念いたしまして、言葉整いませんが結びのご挨拶とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。

令和3年度 千葉市・千葉大学公開市民講座 講演録

千葉氏・禅宗・東アジア
—中世房総をめぐる新たな視座—

令和4年3月発行

発行 千葉市・千葉大学
編集 千葉市立郷土博物館
千葉市中央区亥鼻1-6-1
印刷 株式会社 世広

